

S O A I U n i v e r s i t y

Syllabus

講義要綱

令和元年度(2019)

相愛大学

講義要綱の見方

巻頭の2019年度授業科目一覧で自分の回生の配当科目を確認し、
インデックス番号で履修する授業科目をさがして講義要綱をよく読むこと。

インデックス番号



例)

1-001

ナンバリング	CC100A01	期間	前期
授業科目名	建学の精神/當相敬愛と浄土真宗 I		
英訳科目名	The Philosophy of Soai University (Shin Buddhism) /The Philosophy of Soai University within the Shin Buddhism I		
担当教員名	中平 了悟		
ディプロマ・ポリシー1		ディプロマ・ポリシー2	○
ディプロマ・ポリシー3	○	ディプロマ・ポリシー4	◎
ディプロマ・ポリシー5		ディプロマ・ポリシー6	
授業概要・ポイント	<p>相愛大学の名称は、大乘仏教経典『仏説無量寿経』に述べられている「當相敬愛」から命名されました。「お互いに敬い慈しみあう」という意味です。この大乘仏教の精神こそ、相愛大学「建学の精神」です。</p> <p>さらに、建学の精神には「浄土真宗の精神に基づく教育により、有為な人材を育成することを目的とする」と述べられています。つまり、本講義では大乘仏教の思想と浄土真宗の精神を学ぶことで、相愛大学生としての基盤形成を目指します。</p> <p>本講義を通して、人間を深く見つめ直し、相愛大学生の自覚を涵養しましょう。</p> <p>また、この講義では月一回の「定例礼拝」をはじめ、宗教行事への参加を評価対象としています。この点はよく自覚してください。</p>		
到達目標	<p>本講義と宗教行事への参加を通して、「宗教」というものを知ることから始まり、人類の叡智の結晶である「仏教」の基礎を学ぶ。</p> <p>「大乘仏教」「日本仏教」、そして「浄土真宗」へと展開する道筋をたどっていき、本学の「建学の精神」を充分に理解できるようになる。</p>		
授業計画	<p>第1回 相愛大学で学ぶということについて</p> <p>第2回 人間と宗教 (1) 基礎</p> <p>第3回 人間と宗教 (2) 発展</p> <p>第4回 仏教を学ぶ：ブッダの生涯</p> <p>第5回 仏教を学ぶ：仏教思想の基盤</p> <p>第6回 仏教を学ぶ：大乘仏教への展開</p> <p>第7回 大乘仏教を学ぶ (1) 基礎</p> <p>第8回 大乘仏教を学ぶ (2) 発展</p> <p>第9回 親鸞聖人の教え</p> <p>第10回 浄土真宗を学ぶ (1) 基礎</p> <p>第11回 浄土真宗を学ぶ (2) 発展</p> <p>第12回 日本文化について考える</p> <p>第13回 相愛大学の歴史と精神</p> <p>第14回 相愛大学「建学の精神」について考える</p> <p>第15回 まとめ</p>		
評価方法 (合計100%)	講義への参加態度 (参加状況) ・宗教行事への参加 55% 試験・レポート・課題・提出物 45%		
失格条件	3分の1以上欠席した場合、失格とする。		
予習・復習の準備 学習などのアド バイス	<ul style="list-style-type: none"> ・授業時間外における予習・復習等のアドバイス 身の周りの「宗教的なもの」を観察してみよう。 一度、仏教の本を読んでみよう。 大学の宗教行事に参加して、自分自身を見つめてみよう。 ・授業時間外における予習・復習等に必要時間 講義で紹介する文献や仏教教義・宗教思想に関する参考文献を読む…予習 2時間 (90分) 講義で取り上げた問題や仏教教義・宗教思想について整理する……復習 2時間 (90分) 		
課題へのフィード バック	講義内容や宗教行事に関して提出した課題については、必要に応じて個別もしくは全体にコメントします。		
教科書	原則として指定しない。		
著者名			
出版社			
参考書			
その他	月に一度の「定例礼拝」へ出席し、レポートを提出した者は、適宜評価する。		
備考	僧侶としての実務経験をもとに、この授業を進めます。		
科目生への開講	あり		

目 次

◎授業科目一覽

2019年度 授業科目一覽	p.3
---------------	-----

◎講義要綱

1. 基礎科目・共通科目	p.47
2. 音楽学部 共通専門科目	p.141
3. 音楽学部 専門科目	p.285
4. 人文学部	p.621
5. 人間発達学部	p.841
6. 教職課程科目	p.1067
7. 図書館司書課程科目	p.1111
8. 留学生科目	p.1137
9. 専攻科目	p.1157
10. 大学院	p.1179

Index	配当年次	2016	2016(H28)年度入学生 Ⅳ回生用	配当年次	2017	2017(H29)年度入学生 Ⅱ回生用	配当年次	2018	2018(H30)年度入学生 Ⅱ回生用	配当年次	2019	2019(H31)年度入学生 Ⅰ回生用	区分	2019(H31)年度 担当者	H31 科目生
9-004							専			専		専攻実技B(管弦打楽器)	通年	<管弦打部門>	
9-005							専			専		修了演奏(声楽・器楽)	集中	教務主任(松本 直祐樹)	
9-006							専			専		特殊研究Ⅲ	通年	黒坂 俊昭	
9-007							専			専		作品研究	通年	三鬼 尚味	
9-008							専			専		演奏解釈	通年	中谷 満+泉 貴子+稲垣 聡 +松本 直祐樹	
9-009							専			専		西洋音楽史特殊講義A	前期	村井 晶子	
9-010							専			専		西洋音楽史特殊講義B	後期	村井 晶子	
9-011							専			専		台奏	通年	(管弦打部門)	
9-012							専			専		室内楽	通年	(ピアノ・管弦打部門)	
9-013							専			専		オペラ演習	通年	泉 貴子	
9-014							専			専		通奏低音	通年	青木 好美	
9-015							専			専		室内楽演習	通年	柏木 玲子	
9-016							専			専		オーケストラ特別研究A	通年集中	(管弦打部門)	
9-017							専			専		オーケストラ特別研究B	通年集中	(管弦打部門)	
9-018							専			専		オーケストラ特別実習A	通年集中	(管弦打部門)	
9-019							専			専		オーケストラ特別実習B	通年集中	(管弦打部門)	

10. 大学院

Index	配当年次	2016	2016(H28)年度入学生 Ⅳ回生用	配当年次	2017	2017(H29)年度入学生 Ⅱ回生用	配当年次	2018	2018(H30)年度入学生 Ⅱ回生用	配当年次	2019	2019(H31)年度入学生 Ⅰ回生用	区分	2019(H31)年度 担当者	H31 科目生
10-001				修Ⅰ			修Ⅰ		西洋芸術音楽総合演習Ⅰ	修Ⅰ		西洋芸術音楽総合演習Ⅰ	前期	黒坂 俊昭・泉 貴子・松本 直祐樹	
10-002				修Ⅰ			修Ⅰ		西洋芸術音楽総合演習Ⅱ	修Ⅰ		西洋芸術音楽総合演習Ⅱ	後期	黒坂 俊昭・泉 貴子・松本 直祐樹	
10-003				修Ⅰ			修Ⅰ		現代音楽特論	修Ⅰ		現代音楽特論	前期	中村 滋延	
10-004				修Ⅰ			修Ⅰ		スコア・リーディング	修Ⅰ		スコア・リーディング	集中	若林 千春	
10-005				修Ⅰ			修Ⅰ		楽書講読A	修Ⅰ		楽書講読A	前期	大谷 紀美子	
10-006				修Ⅰ			修Ⅰ		楽書講読B	修Ⅰ		楽書講読B	後期	大谷 紀美子	
10-007				修Ⅰ			修Ⅰ		音楽によるアウトリーチA	修Ⅰ		音楽によるアウトリーチA	後期	前田 昌宏・松谷 葉子	
10-008				修Ⅱ			修Ⅱ		音楽によるアウトリーチB			音楽によるアウトリーチB	前期	前田 昌宏・松谷 葉子	
10-009				修Ⅰ			修Ⅰ		音楽療法特論A	修Ⅰ		音楽療法特論A	前期	石村 真紀	

index	配当 年次	2016 (H28)年度入学生 Ⅳ回生用	2017 (H29)年度入学生 Ⅲ回生用	2018	2018(H30)年度入学生 Ⅱ回生用	2019	2019(H31)年度入学生 Ⅰ回生用	区分	2019(H31)年度 担当者	H31 科目生
10-010				配当 年次 修 I	音楽療法特論 B	配当 年次 修 I	音楽療法特論 B	後期	石原 興子	
10-011				修 I	オペラ特別演習 I	修 I	オペラ特別演習 I	通年	泉 貴子・馬場 清孝	
10-012				修 II	オペラ特別演習 II			通年	泉 貴子・馬場 清孝	
10-013				修 I	オーケストラ特別演習 I	修 I	オーケストラ特別演習 I	通年	<管弦打部門>	
10-014				修 II	オーケストラ特別演習 II			通年	<管弦打部門>	
10-015				修 I	室内楽特別演習 I	修 I	室内楽特別演習 I	通年	斎藤 建寛・小栗 まち絵・稲垣 聡	
10-016				修 II	室内楽特別演習 II			通年	斎藤 建寛・小栗 まち絵・稲垣 聡	
10-017				修 I	演奏理論特別演習 I	修 I	演奏理論特別演習 I	通年	稲垣 聡・斎藤 建寛・清水 信貴・ 中谷 満・泉 貴子	
10-018				修 II	演奏理論特別演習 II			通年	稲垣 聡・斎藤 建寛・清水 信貴・ 中谷 満・泉 貴子	
10-019				修 I	作品分析特別演習 I	修 I	作品分析特別演習 I	通年	松本 直祐樹	
10-020				修 II	作品分析特別演習 II			通年	松本 直祐樹	
10-021				修 I	西洋音楽史特別演習 A	修 I	西洋音楽史特別演習 A	通年	黒坂 俊昭	
10-022				修 II	西洋音楽史特別演習 B			通年	黒坂 俊昭	
10-023				修 I	副科特別実技 I	修 I	副科特別実技 I	通年	黒坂 俊昭・泉 貴子	
10-024				修 II	副科特別実技 II			通年	黒坂 俊昭・泉 貴子	
10-025				修 I	声楽専門実技 I	修 I	声楽専門実技 I	通年	<声楽部門>	
10-026				修 II	声楽専門実技 II			通年	<声楽部門>	
10-027				修 I	鍵盤専門実技 I	修 I	鍵盤専門実技 I	通年	<ピアノ部門>	
10-028				修 II	鍵盤専門実技 II			通年	<ピアノ部門>	
10-029				修 I	器楽専門実技 I (管楽器)	修 I	器楽専門実技 I (管楽器)	通年	<管弦打部門>	
10-030				修 I	器楽専門実技 I (弦楽器)	修 I	器楽専門実技 I (弦楽器)	通年	<管弦打部門>	
10-031				修 I	器楽専門実技 I (打楽器)	修 I	器楽専門実技 I (打楽器)	通年	<管弦打部門>	
10-032				修 II	器楽専門実技 II (管楽器)			通年	<管弦打部門>	
10-033				修 II	器楽専門実技 II (弦楽器)			通年	<管弦打部門>	
10-034				修 II	器楽専門実技 II (打楽器)			通年	<管弦打部門>	
10-035				修 I	作曲専門実技 I	修 I	作曲専門実技 I	通年	<作曲部門>	
10-036				修 II	作曲専門実技 II			通年	<作曲部門>	
10-037				修 I	音楽学研究演習 I	修 I	音楽学研究演習 I	通年	黒坂 俊昭・大谷 紀美子	

index	配当 年次	2016	2016(H28)年度入学生 IV回生用	配当 年次	2017	2017(H29)年度入学生 II回生用	配当 年次	2018	2018(H30)年度入学生 II回生用	配当 年次	2019	2019(H31)年度入学生 I回生用	区分	2019(H31)年度 担当者	H31 科目生
10-038							修 II		音楽学研究演習 II				通年	黒坂 俊昭・大谷 紀美子	
10-039							修 II		作品研究報告書制作				通年	泉 真子・黒坂 俊昭	



10. 大学院



ナンバリング		期間	前期
授業科目名	西洋芸術音楽総合演習 I		
英訳科目名	General Seminar on Western Art Music I		
担当教員名	黒坂 俊昭、松本 直祐樹、泉 貴子		
ディプロマ・ポリシー1		ディプロマ・ポリシー2	
ディプロマ・ポリシー3		ディプロマ・ポリシー4	
ディプロマ・ポリシー5		ディプロマ・ポリシー6	
授業概要・ポイント	研究領域の枠を超えて、西洋芸術音楽の諸相を幅広い視野から捉え、それぞれの一面が創造された音楽文化そのものの背景や状況について、演奏（声楽、鍵盤、器楽）、作曲、音楽学といった異なる研究領域の教員と学生が討論し、演奏を交えて互いに啓発しながら問題に取り組んでいくことによって、受講生自らが西洋芸術音楽を学修する意義や本研究科で研究する意味について考察する。		
到達目標	西洋芸術音楽の諸側面を客観的に考察できるようになる。		
授業計画	<ol style="list-style-type: none"> 1.本研究科の教育研究上の理念と目的、及び本演習の概要と目的の紹介（黒坂・泉・松本） 2.音と音楽の差異について（松本） 3.音とは何か①～音響学的見地から～（松本） 4.音とは何か②～音律の見地から～（松本） 5.音とは何か③～現代の実験的創作～（松本） 6.西洋における芸術音楽の変遷をたどる①～声楽作品を中心に～（泉） 7.西洋における芸術音楽の変遷をたどる②～オペラ全盛期時代へ～（泉） 8.西洋における芸術音楽の変遷をたどる③～調性について～（泉） 9.文学作品と芸術音楽の結びつき（泉） 10.音楽の調和的特徴（黒坂） 11.演奏における主体と客体（黒坂） 12.感動の根拠と実体（黒坂） 13.音楽の営みを再考する（黒坂） 14.受講者個々人が持つ「音楽」の表白と討論（黒坂・泉・松本） 15.音楽について考える意味を総括する（黒坂・泉・松本） 		
評価方法 (合計100%)	授業参加への積極性70% 提出レポートの内容30%		
失格条件	なし		
予習・復讐の準備 学習などのアドバイス	なし		
課題へのフィード バック	なし		
教科書	なし		
著者名			
出版社			
参考書			
その他	本研究科に在籍する学生は全員履修すること		
備考			
科目生への開講	なし		

ナンバリング		期間	後期
授業科目名	西洋芸術音楽総合演習Ⅱ		
英訳科目名	General Seminar on Western Art Music Ⅱ		
担当教員名	黒坂 俊昭、松本 直祐樹、泉 貴子		
ディプロマ・ポリシー1		ディプロマ・ポリシー2	
ディプロマ・ポリシー3		ディプロマ・ポリシー4	
ディプロマ・ポリシー5		ディプロマ・ポリシー6	
授業概要・ポイント	「西洋芸術音楽総合研究Ⅰ」において学修した西洋芸術音楽に関する問題点の発掘、討論、そして解決への手順を基に、受講生自らの音楽活動上の問題点を浮き彫りにし、演奏等を交えながらその解決へと向かう。また本演習に於いても、さらに西洋芸術音楽を学修する意義や本研究科で研究する意味について考察する。		
到達目標	音楽の営みを総合的に把握できるようになる。		
授業計画	<ol style="list-style-type: none"> 1.音楽の営みに於ける対峙する問題の明瞭化（黒坂・泉・松本） 2.音楽と隣接芸術①（松本） 3.音楽と隣接芸術②（松本） 4.音楽を創作することの意味①（松本） 5.音楽を創作することの意味②（松本） 6.演奏、創作と作品解釈について①～作品・テーマの選択～（泉） 7.演奏、創作と作品解釈について②～考察の進め方～（泉） 8.演奏、創作と作品解釈について③～まとめ～（泉） 9.研究発表とディスカッション（泉） 10.音楽と音楽作品の差異（黒坂） 11.音楽と音楽作品の所在（黒坂） 12.芸術観の変遷（黒坂） 13.芸術の純粋性と日常性（黒坂） 14.音楽の営みに於ける問題点の対処に係る討論（黒坂・泉・松本） 15.音楽を客観的に捉える重要性を総括する（黒坂・泉・松本） 		
評価方法 (合計100%)	授業参加への積極性70% 提出レポートの内容30%		
失格条件	なし		
予習・復讐の準備 学習などのアドバイス	なし		
課題へのフィード バック	なし		
教科書	なし		
著者名			
出版社			
参考書			
その他	「西洋芸術音楽総合演習Ⅰ」の単位を修得したうえで、本研究科に在籍する学生は全員履修すること		
備考			
科目生への開講	なし		

ナンバリング		期間	前期
授業科目名	現代音楽特論		
英訳科目名	Special Seminar in Modern Music		
担当教員名	中村 滋延		
ディプロマ・ポリシー1		ディプロマ・ポリシー2	
ディプロマ・ポリシー3		ディプロマ・ポリシー4	
ディプロマ・ポリシー5		ディプロマ・ポリシー6	
授業概要・ポイント	授業の目的は現代音楽にカテゴライズされ得る音楽の実態を予断なく探っていき、現代音楽とは何かについて自分の言葉で表現できるようになることである。それには音楽とは何か、表現するとは何か、さらには生きるためになぜ音楽が必要かについて思いをめぐらさなければならない。豊かに思いをめぐらせるには音楽に関わる様々な事象に多く触れる必要がある。そのため授業においては、聴く・見る・読む・語る機会を様々な観点から提供しあう。		
到達目標	現代音楽とは何かについて具体的例示とともに自分の言葉で語る事が可能になること。これは人間はなぜ音楽を必要とするか、個人と社会の両方の面から、音楽の実践者として考え語ることが必然的に伴う。		
授業計画	<ol style="list-style-type: none"> 1.現代生活と音楽(1)：音楽実践者としての歩みと夢（講師の自己紹介） 2.現代生活と音楽(2)：音楽実践者としての夢（受講者の自己紹介） 3.現代音楽って何？：進歩史観に基づく音楽史概説 4.現代音楽の実態(1)：前衛音楽、実験音楽、伝統主義の音楽 5.現代音楽の実態(2)：記譜法の変化に見る現代音楽の多様性 6.現代音楽の理解(1)：音楽分析法実践例示（調性音楽から十二音音楽） 7.現代音楽の理解(2)：音楽分析法実践例示（総音列音楽、音群的音楽、偶然性音楽） 8.音楽分析の実践(1)：受講者による楽曲分析（受講者自ら選択した楽曲を分析し、それについて討論する） 9.音楽分析の実践(2)：受講者による楽曲分析（受講者自ら選択した楽曲を分析し、それについて討論する） 10.音楽分析の実践(3)：受講者による楽曲分析（受講者自ら選択した楽曲を分析し、それについて討論する） 11.映像と音楽：時間芸術の共通性を活かした新たな表現分野とその可能性 12.テクノロジーと音楽：メディアアート、特に演奏ソフトウェアアート 13.日本の近現代音楽史(1)：唱歌の功罪 14.日本の近現代音楽史(2)：山田耕筰から武満徹まで 15.日本の近代音楽史(3)：武満徹以降 		
評価方法 (合計100%)	学期末のレポート（50%）と、授業ごとの小レポートと授業内での発言（50%）を総合的に考慮して評価。		
失格条件	なし		
予習・復讐の準備 学習などのアドバイス	次の授業への課題実施（予習2時間）。 授業内容整理、特に授業内で提示された音楽にYoutubeなどで再度触れること（復習2時間）。		
課題へのフィード バック	実施課題については授業内で必ずコメントします。 課題内容に関連する事項（たとえば授業に関連して講師自身が行った楽曲分析など）を個人Web（授業内でアドレスを提示します）に掲載します。 最終レポート等についてはポータルサイトを通して全体に向けてコメントします。		
教科書	『現代音楽×メディアアート』（2008）		
著者名	中村滋延		
出版社	九州大学出版会		
参考書			
その他	授業計画は履修者からの要望を受けた話し合いによって部分的に変更することもあり得る。 とにかく音楽・アート好きでさえあれば誰でも歓迎		
備考			
科目生への開講	なし		

ナンバリング		期間	後期
授業科目名	スコア・リーディング		
英訳科目名	Score Reading		
担当教員名	若林 千春		
ディプロマ・ポリシー1		ディプロマ・ポリシー2	
ディプロマ・ポリシー3		ディプロマ・ポリシー4	
ディプロマ・ポリシー5		ディプロマ・ポリシー6	
授業概要・ポイント	広義のソルフェージュ学習の一環として、スコア（総譜）をピアノ演奏により表現する。たとえ実際の楽器がその場に無くとも、架空の音場をバーチャルに実存させるはたらきを通して、脳内に音像を想像・創造する営み。		
到達目標	さまざまな編成のスコアを読み、それを統合的な表現につなげること。		
授業計画	1.二重奏 2.三重奏（弦楽三重奏曲など） 3.合唱 その①（無伴奏混声合唱作品） 4.四重奏 その①（ハイドン・モーツァルトの作品） 5.四重奏 その②（より近代的な作品による実践） 6.合唱 その②（四種の音部記号のよる混合スタイル） 7.五重奏（モーツァルト作品など） 8.六重奏（ブラームス作品など） 9.吹奏楽 その① 10.吹奏楽 その② 11.オーケストラ その①（ハイドン作品など） 12.オーケストラ その②（ベートーベン作品など） 13.オーケストラ その③（ブラームス作品など） 14.オペラ その①（モーツァルト作品など） 15.オペラ その②（ヴェルディ作品など）		
評価方法 (合計100%)	通常の授業での 音楽への姿勢・態度（40%）、及び実技試験（60%）。		
失格条件	なし		
予習・復讐の準備 学習などのアドバイス	なし		
課題へのフィード バック	なし		
教科書	特になし。授業の際に 資料等を提示する。		
著者名			
出版社			
参考書			
その他	ピアノ・和声・対位法・楽式論を履修していることが望ましい。 総譜をピアノで奏することのみにとどまらず、各々の作品の時代様式のあり方や、和声的な遠近感を表出する際のノウハウ、さらには楽式論的な構造的な外在化の方法など、総合的な表現の方向を学習してゆく。またピアノ以外の楽器や音色を「ピアノで表現すること」（ピアノ演奏におけるオーケストレーション）の可能性をも研究することとなる。		
備考			
科目生への開講	なし		

10-005

ナンバリング	期間	前期
授業科目名	楽書講読A	
英訳科目名	Readings in Sources on Music A	
担当教員名	大谷 紀美子	
ディプロマ・ポリシー1	ディプロマ・ポリシー2	
ディプロマ・ポリシー3	ディプロマ・ポリシー4	
ディプロマ・ポリシー5	ディプロマ・ポリシー6	
授業概要・ポイント	西洋芸術音楽に関しては音楽史、楽曲分析、音楽社会学、音楽心理学、音楽美学などの立場から数多くの論文や論考が残されている。それらが音楽学研究は言うまでもなく、作曲の場並びに演奏の場にあっても大いに役立つことに疑いを挟む余地はない。1つの論文を読破することによって論理的思考が鍛えられ、それを自らの活動に汎用する能力が養われる。ただこれらの論文や論考は外国語で記述されたものが多く、その読破は容易でない。授業では丁寧な翻訳と共に、著者の意図する所について討論しながら、外国語で書かれた記述の確実な理解を試みる。	
到達目標	英語で記述された論文を理解し、その内容に関して学生間で討論できること。	
授業計画	1.はじめに。講読する論文に関する簡単な説明。授業の進め方など。 2."People of Allada, This Is Our Return"の最初の部分を読み討論する。 3.Multiple Temporalities の項目を読み討論する。 4."Alladanou" 同上 5.Togbe 同上 6.Indexing Porto Novo / X?gbonu 同上 7.Adjogan : Transformations of Style, Genre, and Signification 同上 8.Postcolonial Traditions : The Beninois Brass Band 同上 9.An Analytical Framework for Alladanou : Intertexts, Indexicality 同上 10.Gambe : Resonance 同上 11.Audience 同上 12>Returns: Space, Time, Intervalle 同上 13.Conclusions 同上 14..まとめ 及び ディスカッション - 1 15.まとめ 及び ディスカッション - 2	
評価方法 (合計100%)	授業中に行う発表 (30%)、ディスカッションへの参加状況およびレポートの提出 (70%)	
失格条件	なし	
予習・復讐の準備 学習などのアドバイス	なし	
課題へのフィード バック	なし	
教科書	"People of Alladam This Is Our Return": Indexicality, Multiple Temporalities, and Resonance in the Music of the Ganbe Brass Band of Benin	
著者名	Sarah Politz	
出版社		
参考書		
その他	特になし	
備考		
科目生への開講	なし	

1

2

3

4

5

6

7

8

9

10

10-006

ナンバリング		期間	後期
授業科目名	楽書講読B		
英訳科目名	Readings in Sources on Music B		
担当教員名	大谷 紀美子		
ディプロマ・ポリシー1		ディプロマ・ポリシー2	
ディプロマ・ポリシー3		ディプロマ・ポリシー4	
ディプロマ・ポリシー5		ディプロマ・ポリシー6	
授業概要・ポイント	楽書講読の授業は、学生の語学力の向上を目指すよりも、外国語で書かれた文書を理解することにある。それは外国語による記述がその言語の持つ論理性と関係があり、その論理によって解されることが望まれることを意味している。その中では、楽譜に沿って具体的に記述された、個別の作品を分析した論文が最も理解しやすく、本演習はそういった作品論等の論文の精読を中心とする。またそこから得られた論理的把握力を演奏等の場に援用する志向も目指していく。		
到達目標	外国語（英語）で記述された楽譜の分析に慣れること。講読を通して、論理的思考を深めること。		
授業計画	<ol style="list-style-type: none"> 1.はじめに。論文・学会誌の紹介。 2.著者紹介等 3.Aguante 4.Chanting as Participatory Performance Tradition and the Social Organization of the Stadium 5.Chanting and Instrumental Playing ① 6.Chanting and Instrumental Playing ② 7.Transgressing the Other: Homophobia and Racism ① 8.Transgressing the Other: Homophobia and Racism ② 9.Profanity, Slurs, and Cognitive Dissonance 10.Participatory Chanting and Deindividuation 11.Plural Bodies and the Performativity of Assemblies 12.Concluding Thoughts 13.討論 ① 14.討論 ② 15.まとめ 		
評価方法 (合計100%)	授業中の発表（30%）および期末レポート（70%）		
失格条件	なし		
予習・復讐の準備 学習などのアドバイス	なし		
課題へのフィード バック	なし		
教科書	'Masculinity, Violence, and Deindividuation in Argentine Soccer Chants: The Sonic Potentials of Participatory Sounding-in-Synchrony		
著者名	Eduardo Herrera		
出版社			
参考書			
その他			
備考			
科目生への開講	なし		

ナンバリング		期間	後期
授業科目名	音楽によるアウトリーチ A		
英訳科目名	Musical outreach A		
担当教員名	前田 昌宏、松谷 葉子		
ディプロマ・ポリシー1		ディプロマ・ポリシー2	
ディプロマ・ポリシー3		ディプロマ・ポリシー4	
ディプロマ・ポリシー5		ディプロマ・ポリシー6	
授業概要・ポイント	<p>学生自身の研究計画にある実技領域が、いかにして社会的要請に即した音楽文化の進展に寄与することが可能かを研究しそれを体現することを目的に展開する。具体的には授業期間中に1回以上、地域社会からの依頼演奏等への出演を義務付ける。自身の出演を研究素材とし、コンテンツ産業のあり方を学習、実際に社会における音楽ビジネスとは何か、音楽がどのように社会に影響を与えるのかを学び研究する。</p> <p>なお、この授業の単位認定責任者は前田昌宏とする。</p>		
到達目標	<p>実技レベルの向上に加えて、試験ではない本番を迎えることの意義を感得するとともに、自身が芸術文化活動を実践するために不足している能力を確認し、それを修得、研究できるようになる。</p>		
授業計画	<ol style="list-style-type: none"> 1.指導者の紹介、授業の進め方と目的の確認 (前田・松谷) 2.出演する公演の決定と公演企画書解説 (前田) 3.エンタテインメントとは何か (松谷) 4.芸術が社会に及ぼす影響 (松谷) 5.コンテンツ産業の構造 (松谷) 6.音楽ビジネス (松谷) 7.公演企画書制作① 事業の目的を把握する (前田) 8.公演企画書制作② シーズとニーズのマッチングとは (前田) 9.公演企画書制作③ その活動は社会にどう影響を与えるか (前田) 10.公演に向けた取り組み① リハーサルと講義 (前田) 11.公演に向けた取り組み② リハーサルと講義 (前田) 12.演奏会・公演本番① (前田) ※実習 13.演奏会・公演本番① (前田) ※実習 14.公演の振り返り (1) (前田) 15.公演の振り返り (2)、まとめ (前田・松谷) 		
評価方法 (合計100%)	講義中の積極性 (30%)、公演企画書とその公演内容 (70%) で評価する。		
失格条件	なし		
予習・復讐の準備 学習などのアドバイス	クラシックに限らず一般社会の音楽の動向を参考に、今後自ら演奏会への方向性を見据えた観点からの企画立案を念頭に多様な公演を見聞し、その内容についての自らの考えを取りまとめておく。		
課題へのフィード バック	公演後はそのレポートを各自提出し、相互に検討を繰り返す。		
教科書	必要に応じてその都度、資料や楽譜等を配布する。		
著者名			
出版社			
参考書			
その他			
備考			
科目生への開講	なし		

ナンバリング	期間	前期
授業科目名	音楽によるアウトリーチ B	
英訳科目名	Musical outreach B	
担当教員名	前田 昌宏、松谷 葉子	
ディプロマ・ポリシー1	ディプロマ・ポリシー2	
ディプロマ・ポリシー3	ディプロマ・ポリシー4	
ディプロマ・ポリシー5	ディプロマ・ポリシー6	
授業概要・ポイント	<p>学生自身の研究計画にある実技領域が、いかにして社会的要請に即した音楽文化の進展に寄与することが可能かを研究しそれを体現することを目的に展開する。具体的には地域社会からの要望をもとにした演奏会、もしくは自主公演を企画し実施する。なお、企画者自身は原則その公演には出演せず企画運営に徹することとする。自身の企画を研究素材とし、文化経済学観点から、芸術の価値とは何かを考察するとともに、奏者やオーケストラ等シーズの把握、予算編成の理解や企業スポンサー等への交渉も担い企画書に取り纏める。</p> <p>なお、この授業の単位認定責任者は前田昌宏とする。</p>	
到達目標	<p>ゼロベースから演奏会を企画し実現できる能力を修得するとともに、時代に即した音楽文化の発展に寄与する斬新な発想を描き、それを表現することの出来る企画立案能力を修得する。</p>	
授業計画	<ol style="list-style-type: none"> 1.指導者の紹介、授業の進め方と目的の確認（前田・松谷） 2.公演企画書制作 企画の趣旨・目的と開催時期（案）の設定（前田） 3.需要と供給（松谷） 4.芸術文化の消費（松谷） 5.価格の持つ意味と文化の価値（松谷） 6.公演企画書① 受講生のうち1～3名（組）の発表と講義（前田） 7.公演企画書② 受講生のうち1～3名（組）の発表と講義（前田） 8.公演企画書③ 受講生のうち1～3名（組）の発表と講義（前田） 9.公演本番①（前田）※実習 10.公演本番②（前田）※実習 11.公演本番③（前田）※実習 12.公演本番④（前田）※実習 13.公演本番⑤（前田）※実習 14.公演の振り返り①（前田・松谷） 15.公演の振り返り②、まとめ（前田・松谷） 	
評価方法 (合計100%)	講義中の積極性（30%）、公演企画書とその公演内容（70%）で評価する。	
失格条件	<p>出席が2/3以上に満たない場合。</p> <p>20分以上の遅刻は欠席とし、20分以内の遅刻は3回で1回の欠席とする。</p> <p>指定された提出物の未提出者。</p>	
予習・復讐の準備 学習などのアドバイス	クラシックに限らず一般社会の音楽の動向を参考に、今後自ら演奏会への方向性を見据えた観点からの企画立案を念頭に多様な公演を見聞し、その内容についての自らの考えを取りまとめておく。	
課題へのフィード バック	公演後はそのレポートを各自提出し、相互に検討を繰り返す。	
教科書	必要に応じてその都度、資料や楽譜等を配布する。	
著者名		
出版社		
参考書		
その他		
備考		
科目生への開講	なし	

ナンバリング		期間	前期
授業科目名	音楽療法特論A		
英訳科目名	Special Seminar in Music Therapy A		
担当教員名	石村 真紀		
ディプロマ・ポリシー1		ディプロマ・ポリシー2	
ディプロマ・ポリシー3		ディプロマ・ポリシー4	
ディプロマ・ポリシー5		ディプロマ・ポリシー6	
授業概要・ポイント	音楽療法の実践基盤や臨床原理について解説しながら、音・音楽の社会的な役目について一考する機会を提供する。音楽療法の歴史の変遷、子供の成長と音楽との関わり、心理学的基盤、対象者の理解と臨床（発達障害、精神障害、失語症、脳性まひなど）を中心に進める。また、実践現場の映像からの考察や楽器を使用しながらの体験的考察なども行い、積極的な意見交換を通して内容を深めていく。		
到達目標	音楽療法とは何か、を自分の言葉で説明できる。地域社会において自分の専門の音楽をどのように生かせるか、具体的な答えを見いだす。		
授業計画	1.音楽の心理的・社会的作用 2.音楽療法の歴史の変遷 3.子供の成長と音楽① 4.子供の成長と音楽② 5.音楽療法士の資質・治療観 6.音楽療法士の資質・治療観・方法論 7.対話としての音・音楽 8.対象者についての理解と臨床①知的障害 9.対象者についての理解と臨床②発達障害（自閉スペクトラム） 10.対象者についての理解と臨床③発達障害（LD・AD/HD） 11.対象者についての理解と臨床④ダウン症・脳性麻痺 12.対象者についての理解と臨床⑤失語症 13.対象者についての理解と臨床⑥精神障害（鬱・不安神経症） 14.音楽療法の周辺領域における研究 15.まとめ		
評価方法 (合計100%)	授業参加態度15%、レポート作成15%、試験70% 3分の1欠席したものは失格とする。		
失格条件	試験を受けなかったもの。3分の1以上の欠席		
予習・復讐の準備 学習などのアドバイス	授業に関心を持った内容について自ら調べレポートを作成（2時間）		
課題へのフィード バック	課題の発表を短くしてもらうので、それに対して個別にコメントします。		
教科書	プリントを配布		
著者名			
出版社			
参考書	参考文献については授業時に適宜紹介する		
その他			
備考	音楽療法士としての実務経験をもとに、この授業を進めます。		
科目生への開講	なし		

10-010

ナンバリング		期間	後期
授業科目名	音楽療法特論B		
英訳科目名	Special Seminar in Music Therapy B		
担当教員名	石原 興子		
ディプロマ・ポリシー1		ディプロマ・ポリシー2	
ディプロマ・ポリシー3		ディプロマ・ポリシー4	
ディプロマ・ポリシー5		ディプロマ・ポリシー6	
授業概要・ポイント	音楽療法の臨床的分野を紹介し、様々な音・音楽の捉え方、人の発達や変容にかかせない芸術活動の営みに潜在している表現することの意味を探ることを目指す。特に、精神保健領域での知識や対象者についての理解を深め、音楽療法における精神的援助について考察する。授業では、視聴覚教材を用いながら、また楽器を用いた実際の演習を通して、ディスカッションを行いながら内容を深めていく。		
到達目標	音・音楽について柔軟な考え方・捉え方ができるようになる。精神保健領域における音楽療法について、基本的な知識や理解ができる。表現活動の演習を通して、自己を知る。人が表現することの意味について考えていくことができる。		
授業計画	第1回 イン트로ダクション 第2回 音と「きく」こと 第3回 コミュニケーションと精神的援助 第4回 精神保健領域の背景 第5回 対象者の理解①：統合失調症スペクトラム障害及び他の精神病性障害群 第6回 対象者の理解②：双極性障害及び関連障害群・抑うつ障害群 第7回 対象者の理解③：不安症群・強迫性及び関連症群・摂食障害群・認知症 第8回 音楽療法における音・音楽 第9回 音と音楽の要素 第10回 臨床事例研究と理論背景 第11回 療法における音楽と言葉 第12回 描画と音・音楽療法 第13回 グループダイナミックス 第14回 音楽療法の実際と役割 第15回 まとめ		
評価方法 (合計100%)	授業への参加態度20%、発表40%、レポート40%		
失格条件	出席回数が全授業の3分の2以上満たない場合、発表の不参加、レポート提出しなかった場合は失格条件とする。		
予習・復讐の準備 学習などのアドバイス	授業内で紹介する文献を読む。(1時間) 授業内で出された課題について調べる。(3時間)		
課題へのフィード バック	課題提出後、個別および全体に向けコメントします。		
教科書	不使用。適宜プリントを配布。		
著者名			
出版社			
参考書	適宜授業内で紹介。		
その他	特になし		
備考			
科目生への開講	なし		

ナンバリング		期間	通年
授業科目名	オペラ特別演習 I		
英訳科目名	Opera Workshop I		
担当教員名	泉 貴子、馬場 清孝		
ディプロマ・ポリシー1		ディプロマ・ポリシー2	
ディプロマ・ポリシー3		ディプロマ・ポリシー4	
ディプロマ・ポリシー5		ディプロマ・ポリシー6	
授業概要・ポイント	オペラを選択した声楽領域の学生を対象に行う。将来オペラの舞台に立つために必要な歌唱技術の向上を目指し、演劇的要素の側面から表現法を修得する。台本の読解、舞台語発音、作品解釈、歌唱、演技技術の研鑽。履修者の声にあった演目の役柄を選び、オペラ作品からアリア・重唱を抜粋して取り上げる。 なお、この授業の単位認定責任者は泉貴子とする。		
到達目標	将来オペラの舞台に立つために必要な歌唱技術の向上を目指し、演劇的要素の側面から表現法を修得する。		
授業計画	<p>1.オリエンテーション (泉・馬場) 演目を決めるための試演会。今後の授業の進め方等についての説明や研究課題について決める。 2.モーツァルトを中心とした古典派オペラ作品の研究① レチタティーヴォのディクシオン指導 (泉) 3.モーツァルトを中心とした古典派オペラ作品の研究② レチタティーヴォの演習 (馬場) 4.モーツァルトを中心とした古典派オペラ作品の研究③ 音楽稽古 (馬場) 5.モーツァルトを中心とした古典派オペラ作品の研究④ 音楽稽古 (泉) 6.モーツァルトを中心とした古典派オペラ作品の研究⑤ まとめ (泉・馬場) 7.モーツァルトを中心とした古典派オペラ作品の研究⑥ まとめ (泉・馬場) 8.古典派～ロマン派オペラ作品の研究① 音楽稽古 (馬場) 9.古典派～ロマン派オペラ作品の研究② 音楽稽古 (泉) 10.古典派～ロマン派オペラ作品の研究③ 音楽稽古 試演会の作品研究① ディクシオン (泉・馬場) 11.古典派～ロマン派オペラ作品の研究④ 音楽稽古 試演会の作品研究② ディクシオン (泉・馬場) 12.古典派～ロマン派オペラ作品の研究⑤ まとめ 試演会の作品研究③ 音楽稽古 (泉・馬場) 13.試演会の作品研究④ 音楽稽古 (泉) 14.前期研究発表 リハーサル (泉・馬場) ※実習 15.前期研究発表 演奏会形式 (泉・馬場) ※実習</p> <p>(以下、後期期間中に集中開講) 16.試演会に向けて演習① 指揮者による音楽稽古 (泉・馬場) 17.試演会に向けて演習② 指揮者による音楽稽古・作品分析 (泉・馬場) 18.試演会に向けて演習③ 指揮者による音楽稽古・作品解釈 (泉・馬場) 19.試演会に向けて演習④ 指揮者による音楽稽古・ディクシオン (泉・馬場) 20.試演会に向けての演習⑤ 演出家によるコンセプト (泉・馬場) 21.試演会に向けての演習⑥ 演出家による作品解釈・役柄の考察 (泉・馬場) 22～23. 試演会に向けての演習⑦ 演出家による立ち稽古 (泉・馬場) 24～26. 試演会に向けて 指揮者と演出家による立ち稽古 (泉・馬場) 27.試演会HP① (泉・馬場) ※実習 28.試演会HP②・なおし (泉・馬場) ※実習 29.試演会GP (泉・馬場) ※実習 30.試演会 (泉・馬場) ※実習</p>		
評価方法 (合計100%)	研究発表・試演会 (70%) をベースに、研究への取組み方 (30%) を加えて評価する。		
失格条件	出席日数を2/3満たしていないもの。研究発表、試演会に出席しなかったもの		
予習・復讐の準備 学習などのアドバイス	短期間での譜読みが求められる。またレチタティーヴォ・セッコは必ず朗読をすること。意識ではなく、一つ一つの単語の意味を調べること。		
課題へのフィード バック	毎回授業で出された注意点・課題は次回以降の授業をかけてクリアーしていくよう、繰り返し繰り返し実践していく。		
教科書	演習中に適宜紹介する。また、必要に応じてその都度、楽譜等を配布する。		
著者名			
出版社			
参考書			
その他	専門研究科目群で声楽専門実技を履修する者に限る。 第16回から30回の演習については、教育効果に鑑み後期期間中に設定する期間で集中開講とする。		
備考			
科目生への開講	なし		

ナンバリング	期間	通年
授業科目名	オペラ特別演習Ⅱ	
英訳科目名	Opera Workshop Ⅱ	
担当教員名	泉 貴子、馬場 清孝	
ディプロマ・ポリシー1	ディプロマ・ポリシー2	
ディプロマ・ポリシー3	ディプロマ・ポリシー4	
ディプロマ・ポリシー5	ディプロマ・ポリシー6	
授業概要・ポイント	<p>オペラを選択した声楽領域の学生を対象に行う。(オペラ特別演習Ⅰを履修していることが望ましい。)オペラ特別演習Ⅰで修得したことを礎としてオペラに必要な歌唱技術の更なる向上を目指し、表現法についても考察を深める。</p> <p>台本の読解、舞台語発音、作品解釈、歌唱、演技技術の研鑽。</p> <p>履修者の声にあった演目の役柄を選び、オペラ作品からアリア・重唱を抜粋して取り上げ、演習の課題(古典～現代作品まで)と修了演奏の演目の稽古を行う。</p> <p>なお、この授業の単位認定責任者は泉貴子とする。</p>	
到達目標	オペラ特別演習Ⅰで修得したことを礎としてオペラに必要な歌唱技術の更なる向上を目指し、表現法についても考察を深める。	
授業計画	<p>1.オリエンテーション 前期演習の課題と演奏会演目を決める。今後の授業の進め方や研究課題について教員と相談する。(泉・馬場)</p> <p>2.演習課題① レチタティーヴォ等のディクシオン指導(馬場)</p> <p>3.演習課題② レチタティーヴォ等のディクシオン実践(泉)</p> <p>4.演習課題③ 音楽稽古(泉)</p> <p>5.演習課題④ 音楽稽古(馬場)</p> <p>6.演習課題⑤と修了演奏研究課題① 音楽稽古(アンサンブル中心)(泉・馬場)</p> <p>7.演習課題⑥と修了演奏研究課題② 音楽稽古(アンサンブル中心)(泉・馬場)</p> <p>8.演習課題⑦と修了演奏研究課題③ 音楽稽古(アンサンブルとアリア)(泉・馬場)</p> <p>9.修了演奏研究課題④ 音楽稽古(ディクシオン中心)(泉)</p> <p>10.修了演奏研究課題⑤ 音楽稽古(アンサンブル中心)(泉・馬場)</p> <p>11.修了演奏研究課題⑥ 音楽稽古(アンサンブル中心)(泉・馬場)</p> <p>12.修了演奏研究課題⑦ 音楽稽古(アリア中心)(泉)</p> <p>13.修了演奏研究課題⑧ 音楽稽古(アリア中心)(馬場)</p> <p>14.修了演奏研究課題⑨ 音楽稽古(アリア・アンサンブル)(泉・馬場)</p> <p>15.前期まとめ(泉・馬場)</p> <p>(以下、後期期間中に集中開講)</p> <p>16～17. 修了演奏会に向けて演習①② 指揮者による音楽稽古(泉・馬場)</p> <p>18.修了演奏会に向けて演習③ 指揮者による作品分析(泉・馬場)</p> <p>19.修了演奏会に向けて演習④ 指揮者による作品解釈(泉・馬場)</p> <p>20.修了演奏会に向けて演習⑤ 演出家によるコンセプト(泉・馬場)</p> <p>21.修了演奏会に向けて演習⑥ 演出家による演技指導(泉・馬場)</p> <p>22.修了演奏会に向けて演習⑦ 演出家による役柄の考察(泉・馬場)</p> <p>23.修了演奏会に向けて演習⑧ 演出家による立ち稽古(泉・馬場)</p> <p>24～25. 修了演奏会に向けて演習⑨⑩ 指揮者、演出家による立ち稽古(泉・馬場)</p> <p>26.修了演奏会HP(泉・馬場)※実習</p> <p>27.修了演奏会HP(泉・馬場)※実習</p> <p>28～29. 修了演奏会GP(泉・馬場)※実習</p> <p>30.修了演奏会(泉・馬場)※実習</p>	
評価方法 (合計100%)	研究発表・試演会(70%)をベースに、研究への取組み方(30%)を加えて評価する。	
失格条件	修了演奏会に出演しなかったもの	
予習・復讐の準備 学習などのアドバイス	短期間での譜読みが求められる。またレチタティーヴォ・セッコは必ず朗読をすること。意識ではなく、一つ一つの単語の意味を調べること。	
課題へのフィード バック	毎回授業で出された注意点・課題は次回以降の授業をかけてクリアーしていくよう、繰り返し繰り返し実践していく。	
教科書	演習中に適宜紹介する。また、必要に応じてその都度、楽譜等を配布する。	
著者名		
出版社		
参考書		
その他	専門研究科目群で声楽専門実技を履修する者で、原則「オペラ特別演習Ⅰ」の単位を修得した者に限る。第16回から第30回の演習においては、教育的効果を鑑み後期授業期間中に集中開講とする。	
備考		
科目生への開講	なし	

ナンバリング		期間	通年
授業科目名	オーケストラ特別演習 I		
英訳科目名	Orchestra I		
担当教員名	管弦打部門		
ディプロマ・ポリシー1		ディプロマ・ポリシー2	
ディプロマ・ポリシー3		ディプロマ・ポリシー4	
ディプロマ・ポリシー5		ディプロマ・ポリシー6	
授業概要・ポイント	<p>オーケストラに関する諸活動を経験しつつ、現代社会におけるオーケストラの在り方を研究する。具体的には相愛オーケストラに新たに編成する「相愛フィルハーモニア」（相愛学園で音楽教育を担う教職員、卒業生のうち社会で活躍する奏者に研究科生等を加えて編成）を研究教材（活動実態）として、自主公演への出演やオペラ等との共演を果たす他、オーケストラスタディとして国内外の諸団体への実習などにも参加する。出演と運営の両側面を経験したうえで研究レポートを提出・発表する。授業形態は演習を基本とし、オーケストラ合奏、楽曲分析、実習を加えて実施する。</p> <p>なお、この授業の単位認定責任者は中谷満とする。</p>		
到達目標	<p>オーケストラ活動に関連した自身の目標を明確にしたうえで、それに資する演奏技術の向上をめざすとともに、オーケストラをキーワードとして、社会情勢等も考察して研究レポートを取纏めこれを発表できるようになる。</p>		
授業計画	<p>1.オリエンテーション① 授業の進め方と目的の確認（中谷） 2.オリエンテーション② 役割分担、公演スケジュール、演奏曲目、楽譜等確認（中谷） 3～4. 合奏、スコアリーディング、指揮者の表現したい音楽の確認 （飯塚・清水・田辺・中谷）※隔週連続2コマ開講 5～6. 細分奏 音程、ハーモニーの調和（飯塚・清水・田辺・中谷）※隔週連続2コマ開講 7～8. 分奏 各楽器間のアンサンブル（飯塚・清水・田辺・中谷）※隔週連続2コマ開講 9～10.合奏 表現力の向上（飯塚・清水・田辺・中谷）※隔週連続2コマ開講 11～12.ゲネプロ・本番 観客を前にした演奏表現 （飯塚・清水・田辺・中谷・尾高・円光寺・梅田・小林）※学外実習 13. 研究レポートのテーマ発表（中谷） 14～16. オーケストラスタディ、他楽団への研修およびエキストラ出演等（清水・中谷）※学外実習 17～18. 合奏 地域社会からの依頼演奏出演に向けた合奏（飯塚・清水・田辺・中谷）※隔週連続2コマ開講 19～20. 細分奏 音程、ハーモニーの調和（飯塚・清水・田辺・中谷）※隔週連続2コマ開講 21～22. 分奏 各楽器間のアンサンブル（飯塚・清水・田辺・中谷）※隔週連続2コマ開講 23～24. 合奏 地域社会のニーズとシーズについての考察を含む （飯塚・清水・田辺・中谷）※隔週連続2コマ開講 25～26. ゲネプロ・本番（飯塚・清水・田辺・中谷・尾高・円光寺・梅田・小林）※学外実習 27. 研究レポート制作 各自で研究レポートを取り纏め（中谷） 28. 研究レポート発表（1） 受講生のうち3～4名（組）の発表と討議（飯塚・清水・田辺・中谷） 29. 研究レポート発表（2） 受講生のうち3～4名（組）の発表と討議（飯塚・清水・田辺・中谷） 30. まとめ（中谷）</p>		
評価方法 (合計100%)	<p>授業参加への積極性30% 研究レポートの内容50% 各種公演の総合評価20%</p>		
失格条件	なし		
予習・復讐の準備 学習などのアドバイス	課題について事前に準備、練習し実習にのぞむ事		
課題へのフィード バック	各演奏会終了後、全体に向けてコメントします。		
教科書	演習中に適宜紹介する。また、必要に応じてその都度、楽譜等を配布する。		
著者名			
出版社			
参考書			
その他	<p>専門研究科目群で器楽専門技を履修する者、または特に履修の意義がある研究生のうち研究科委員会でこれを承認した者に限る。 合奏については、教育効果に鑑み「オーケストラ特別演習Ⅱ」と合同で行うことがある。 指揮者は年度により入れ替わりで担当する予定である。</p>		
備考			
科目生への開講	なし		

ナンバリング		期間	通年
授業科目名	オーケストラ特別演習Ⅱ		
英訳科目名	Orchestra Ⅱ		
担当教員名	管弦打部門		
ディプロマ・ポリシー1		ディプロマ・ポリシー2	
ディプロマ・ポリシー3		ディプロマ・ポリシー4	
ディプロマ・ポリシー5		ディプロマ・ポリシー6	
授業概要・ポイント	<p>オーケストラに関する諸活動を経験しつつ、現代社会におけるオーケストラの在り方を研究する。具体的には相愛オーケストラに新たに編成する「相愛フィルハーモニア」（相愛学園で音楽教育を担う教職員、卒業生のうち社会で活躍する奏者に研究科生等を加えて編成）を研究教材（活動実態）として、オーケストラに関連した自身の目標に即した活動を実践する。ソリスト・楽団オー디션等を目標とするのであればそれに向けた企画をするなど、相愛フィルハーモニアと連動したキャリア活動を展開する。また、自主公演の企画や地域社会からの依頼演奏への対応（編成・曲目の決定、演奏会の運営等）も担うこととする。</p> <p>なお、この授業の単位認定責任者は中谷満とする。</p>		
到達目標	<p>現状の実技能力の客観的な把握とキャリア計画を明確にする。また、依頼演奏などオーケストラの運営を総合的に理解し収支計画を含む事業報告が可能な能力も併せて修得できるようになる。</p>		
授業計画	<p>1.オリエンテーション (1) 授業の進め方と目的の確認 (中谷)</p> <p>2.演奏会企画 自主公演および地域社会からの演奏依頼対応の決定、「相愛フィルハーモニア」の年度計画の策定 (中谷)</p> <p>3～4.合奏 スコアリーディング、ソリスト、コンサートマスターとの連携 (飯塚・清水・田辺・中谷) ※隔週連続2コマ開講</p> <p>5～6.細分奏 音程、ハーモニーの調和 (飯塚・清水・田辺・中谷) ※隔週連続2コマ開講</p> <p>7～8.分奏 各楽器間のアンサンブル (飯塚・清水・田辺・中谷) ※隔週連続2コマ開講</p> <p>9～10.合奏 表現力の向上 (飯塚・清水・田辺・中谷) ※隔週連続2コマ開講</p> <p>11～12.ゲネプロ・本番 (飯塚・清水・田辺・中谷・尾高・円光寺・梅田・小林) ※学外実習</p> <p>13. 事業報告書制作 収支を含む事業報告書の作成 (中谷)</p> <p>14. 事業報告書発表、収支報告を含む事業報告書の発表 (中谷)</p> <p>15～17.各種オー디션対策 (飯塚・清水・田辺・中谷)</p> <p>18～19.地域社会からの依頼演奏出演に向けた合奏 (飯塚・清水・田辺・中谷) ※隔週連続2コマ開講</p> <p>20～21.細分奏 音程、ハーモニーの調和 (飯塚・清水・田辺・中谷) ※隔週連続2コマ開講</p> <p>22～23.分奏 各楽器間のアンサンブル (飯塚・清水・田辺・中谷) ※隔週連続2コマ開講</p> <p>24～25.合奏 地域社会のニーズに応じた表現力の研究 (飯塚・清水・田辺・中谷) ※隔週連続2コマ開講</p> <p>26～27.ゲネプロ・本番 (飯塚・清水・田辺・中谷・尾高・円光寺・梅田・小林) ※学外実習</p> <p>28.事業報告書制作 収支を含む事業報告書の作成 (中谷)</p> <p>29.事業報告書発表、討論 収支報告を含む事業報告書の発表 (中谷)</p> <p>30.まとめ (中谷)</p>		
評価方法 (合計100%)	<p>授業参加への積極性30%</p> <p>研究レポートの内容50%</p> <p>各種公演の総合評価20%</p>		
失格条件	なし		
予習・復讐の準備 学習などのアドバイス	課題について事前に準備、練習し実習にのぞむ事		
課題へのフィード バック	各演奏会終了後、全体に向けてコメントします。		
教科書	演習中に適宜紹介する。また、必要に応じてその都度、楽譜等を配布する。		
著者名			
出版社			
参考書			
その他	<p>専門研究科目群で楽器専門実技を履修する者、または特に履修の意義がある研究生のうち研究科委員会でこれを承認した者で、「オーケストラ特別研究Ⅰ」の単位を修得した者に限る。</p> <p>合奏については、その教育効果に鑑み「オーケストラ特別演習Ⅰ」と合同で行うことがある。</p> <p>指揮者は年度により入れ替わりで担当する予定である。</p>		
備考			
科目生への開講	なし		

ナンバリング		期間	通年
授業科目名	室内楽特別演習 I		
英訳科目名	Chamber music I		
担当教員名	斎藤 建寛、稲垣 聡、小栗 まち絵		
ディプロマ・ポリシー1		ディプロマ・ポリシー2	
ディプロマ・ポリシー3		ディプロマ・ポリシー4	
ディプロマ・ポリシー5		ディプロマ・ポリシー6	
授業概要・ポイント	<p>学部で習得した基本的な各パート相互の合わせ方、バランス感覚を活かし、さらに楽曲の対位的、和声的、旋律的な構造を分析し、各パートがその中でどのような関わりを持ち、どのような役割を演じるのかという理解を深め、より精緻なアンサンブル能力を培っていく。授業は初回にグループを編成し、3名の教員が順に指導にあたるオムニバス形式で進められ、演奏に参加しない場合は聴き手（聴衆）となり、相互の立場からの討論によってより良い演奏を見出していく。</p> <p>なお、この授業の単位認定責任者は斎藤建寛とする。</p>		
到達目標	<p>他者と音楽を共有する上で、互いの音楽性、個性を理解・尊重し、調和を重んじる豊かな人間性を育む。また社会において他の複数の演奏者と共有する演奏の場の諸相に円滑に対応し、社会的要請に応える室内楽演奏能力を培うことを目的とする。</p>		
授業計画	<ol style="list-style-type: none"> 1.オリエンテーション 担当教員紹介、グループの編成、授業の概要（稲垣・小栗・斎藤） 2.室内楽の時代変遷①バロック時代（斎藤） 3.室内楽の時代変遷②古典派時代（斎藤） 4.室内楽の時代変遷③ロマン派時代（斎藤） 5.室内楽の時代変遷④近代～現代（斎藤） 6.正しいピッチの合わせ方①（斎藤） 7.正しいピッチの合わせ方②（斎藤） 8.室内楽演奏における「合図」に関する考察（斎藤） 9.弦楽器の倍音について（斎藤） 10.倍音を生かした音響の作り方（斎藤） 11.発表演奏と討論①（稲垣・小栗・斎藤） 12.室内楽におけるピアニストの役割①（稲垣） 13.室内楽におけるピアニストの役割②（稲垣） 14.ピアノを含む室内楽のバランスについて①（稲垣） 15.ピアノを含む室内楽のバランスについて②（稲垣） 16.ピアノと他楽器による音響の作り方①（稲垣） 17.ピアノと他楽器による音響の作り方②（稲垣） 18.ピアノ・デュオについて①四手連弾（稲垣） 19.ピアノ・デュオについて②二台のピアノ（稲垣） 20.発表演奏と討論②（稲垣・小栗・斎藤） 21.弦楽器を含む室内楽編成の概要（小栗） 22.弦楽四重奏の演奏技術①（小栗） 23.弦楽四重奏の演奏技術②（小栗） 24.リハーサルの仕方（小栗） 25.スコアの読み方①（小栗） 26.スコアの読み方②（小栗） 27.室内楽曲分析①（小栗） 28.室内楽曲分析②（小栗） 29.発表演奏と討論③（稲垣・小栗・斎藤） 30.まとめ（稲垣・小栗・斎藤） 		
評価方法 (合計100%)	3度の発表演奏（75%）、各授業での積極性（25%）で評価する。		
失格条件	なし		
予習・復讐の準備 学習などのアドバイス	なし		
課題へのフィード バック	なし		
教科書	必要に応じてその都度、楽譜等を配布する。		
著者名			
出版社			
参考書			
その他	専門研究科目群で声楽・鍵盤・器楽を履修する者、または特に履修の意義がある研究生のうち研究科委員会でこれを承認した者に限る。		
備考			
科目生への開講	なし		

ナンバリング		期間	通年
授業科目名	室内楽特別演習Ⅱ		
英訳科目名	Chamber musicⅡ		
担当教員名	斎藤 建寛、稲垣 聡、小栗 まち絵		
ディプロマ・ポリシー1		ディプロマ・ポリシー2	
ディプロマ・ポリシー3		ディプロマ・ポリシー4	
ディプロマ・ポリシー5		ディプロマ・ポリシー6	
授業概要・ポイント	室内楽特別演習Ⅰで培った室内楽の演奏技術および考え方をもちに、室内楽特別演習Ⅱにおいては、より高度な次元を目指して総合的なレベル・アップをはかる。綿密にスコア(総譜)を読むことから作品の構造、パートの相互関係をより深く把握し、演奏時に主要な役割を持つパートを視覚的にも追えるほどの演奏力を求めていく。授業は室内楽特別演習Ⅰ同様、3名の教員により行なわれるが、演奏のみに留まらず、演奏会の自主企画・運営にも及んで、より良い演奏会の在り方を模索していく。 なお、この授業の単位認定責任者は斎藤建寛とする。		
到達目標	あらゆる演奏の場で、これまでに培われた室内楽演奏能力を最大限発揮するほか、室内楽演奏会の自主企画・運営に関する取り組みに発展させ、将来において社会・地域に貢献し得る人材を育む。		
授業計画	<ol style="list-style-type: none"> 1.オリエンテーション 室内楽のグループ編成 室内楽特別演習Ⅰの振り返り (稲垣・小栗・斎藤) 2.室内楽曲の研究① (小栗) 3.室内楽曲の研究② (小栗) 4.室内楽曲の研究発表と討論 (小栗) 5.室内楽演奏会におけるステージマナー研究① (小栗) 6.室内楽演奏会におけるステージマナー研究② (小栗) 7.室内楽演奏会のプログラミング研究① (小栗) 8.室内楽演奏会のプログラミング研究② (小栗) 9.発表演奏と討論① (稲垣・小栗・斎藤) 10.室内楽作品研究レポート作成 (稲垣・小栗・斎藤) 11.室内楽作品研究レポート発表 (稲垣・小栗・斎藤) 12.弦楽器による二重奏の演奏技術 (斎藤) 13.弦楽器と管楽器による編成の演奏技術 (斎藤) 14.規範となる音源試聴による演奏研究① (斎藤) 15.規範となる音源試聴による演奏研究② (斎藤) 16.F.プーランク作品における弦楽器の扱い方 (斎藤) 17.F.プーランク作品における管楽器の扱い方 (斎藤) 18.室内楽における低音楽器の役割 (斎藤) 19.発表演奏と討論② (稲垣・小栗・斎藤) 20.ピアノを含む室内楽曲の研究① (稲垣) 21.ピアノを含む室内楽曲の研究② (稲垣) 22.ピアノを含む室内楽曲の研究③ (稲垣) 23.古典派時代のピアノ三重奏曲における演奏技法 (稲垣) 24.ロマン派時代以降のピアノ五重奏における演奏技法 (稲垣) 25.近現代の室内楽の演奏法① (稲垣) 26.近現代の室内楽の演奏法② (稲垣) 27.発表演奏と討論③ (稲垣・小栗・斎藤) 28.室内楽演奏会の自主企画案 (模擬) の作成 (稲垣・小栗・斎藤) 29.室内楽演奏会の自主企画案 (模擬) の発表と討論① (稲垣・小栗・斎藤) 30.室内楽演奏会の自主企画案 (模擬) の発表と討論②・まとめ (稲垣・小栗・斎藤) 		
評価方法 (合計100%)	室内楽作品研究レポート発表と室内楽演奏会の自主企画案 (70%) 各授業での積極性 (30%)		
失格条件	なし		
予習・復讐の準備 学習などのアドバイス	なし		
課題へのフィード バック	なし		
教科書	必要に応じてその都度、楽譜等を配布する。		
著者名			
出版社			
参考書			
その他	専門研究科目群で声楽・鍵盤・器楽を履修する者、または特に履修の意義がある研究生のうち研究科委員会でこれを承認した者で、「室内楽特別演習Ⅰ」の単位を修得した者に限る。		
備考			
科目生への開講	なし		

ナンバリング		期間	通年
授業科目名	演奏理論特別演習 I		
英訳科目名	Special Seminar in Performing theory I		
担当教員名	稲垣 聡、中谷 満、清水 信貴、斎藤 建寛、泉 貴子		
ディプロマ・ポリシー1		ディプロマ・ポリシー2	
ディプロマ・ポリシー3		ディプロマ・ポリシー4	
ディプロマ・ポリシー5		ディプロマ・ポリシー6	
授業概要・ポイント	<p>声楽・器楽の歴史、変遷と発展について西洋音楽史に基づいた考察から、発声法や楽器の構造分析と楽器演奏法等の基礎知識を習得することにより、様々な演奏表現の可能性を研究することを目的とする。なお、授業は声楽においてはバロック唱法から歌曲・オペラ、器楽においてはピアノ、弦楽器、管楽器、打楽器を対象とし、それぞれ5名の教員によるオムニバス形式で進める。</p>		
到達目標	<p>声楽・器楽の歴史と変遷から楽器法・演奏法の考察と、演奏表現の可能性を研究できるようになる。</p>		
授業計画	<ol style="list-style-type: none"> 1.年間の授業計画と内容についての概説（稲垣・斎藤・清水・中谷・泉） 2.声楽分野における歴史、変遷と発展についての概説（泉） 3.バロック唱法についての考察（泉） 4.歌曲についての考察（泉） 5.オペラについての考察（泉） 6.声楽分野についてのまとめ（泉） 7.鍵盤楽器における歴史、変遷と発展についての概説（稲垣） 8.バロック時代の鍵盤楽器のメカニズムと作品についての考察（稲垣） 9.古典派からロマン派へのピアノの変遷と発展についての考察①（稲垣） 10.古典派からロマン派へのピアノの変遷と発展についての考察②（稲垣） 11.近代以降のピアノリズムと作品についての考察（稲垣） 12.弦楽器の歴史、変遷と発展についての概説（斎藤） 13.弦楽器の楽器構造とバロック時代の奏法についての考察（斎藤） 14.古典派からロマン派への弦楽器の変遷と発展についての考察（斎藤） 15.近代以降の作品と弦楽器の演奏法についての考察（斎藤） 16.管楽器の歴史、変遷と発展についての概説（清水） 17.管楽器の楽器構造とバロック時代の奏法についての考察（清水） 18.古典派からロマン派への管楽器の変遷と発展についての考察（清水） 19.近代以降の作品と演奏法についての考察（清水） 20.打楽器の歴史、変遷と発展についての概説（中谷） 21.体鳴楽器の構造と奏法についての考察（中谷） 22.膜鳴楽器の構造と奏法についての考察（中谷） 23.鍵盤打楽器の構造と奏法についての考察（中谷） 24.声楽分野における研究演習（泉） 25.ピアノ（鍵盤楽器）における研究演習（稲垣） 26.弦楽器における研究演習（斎藤） 27.管楽器における研究演習（清水） 28.打楽器における研究演習（中谷） 29.研究演習発表①（稲垣・斎藤・清水・中谷・泉） 30.研究演習発表②（稲垣・斎藤・清水・中谷・泉） 		
評価方法 (合計100%)	<p>演奏実習と研究発表（50%） 講義中の積極性（50%）</p>		
失格条件	なし		
予習・復讐の準備 学習などのアドバイス	なし		
課題へのフィード バック	なし		
教科書	演習中に適宜紹介する。また、必要に応じてその都度、楽譜等を配布する。		
著者名			
出版社			
参考書			
その他			
備考			
科目生への開講	なし		

ナンバリング	期間	通年
授業科目名	演奏理論特別演習Ⅱ	
英訳科目名	Special Seminar in Performing theory II	
担当教員名	稲垣 聡、中谷 満、清水 信貴、斎藤 建寛、泉 貴子	
ディプロマ・ポリシー1	ディプロマ・ポリシー2	
ディプロマ・ポリシー3	ディプロマ・ポリシー4	
ディプロマ・ポリシー5	ディプロマ・ポリシー6	
授業概要・ポイント	演奏理論特別実習Ⅰで研究した内容に基づいて、発声法や楽器構造の分析と楽器演奏法等の基礎知識から、様々な演奏表現の可能性を実践的に研究することにより、自己の演奏芸術を極めることを目的とする。なお、授業は6名の教員によるオムニバス形式で進める。 なお、この授業の単位認定責任者は稲垣聡とする。	
到達目標	声楽・器楽の歴史と楽器法・演奏法の考察と実践的な研究により、独奏およびアンサンブル能力と高度な演奏表現を研究する。	
授業計画	1.年間の授業計画と内容についての概説（稲垣・斎藤・清水・中谷・泉） 2.近代以降の声楽作品（歌曲・オペラ）と演奏についての考察①（泉） 3.近代以降の声楽作品（歌曲・オペラ）と演奏についての考察②（泉） 4.20世紀のピアノ作品と現代特殊奏法についての考察①（稲垣） 5.20世紀のピアノ作品と現代特殊奏法についての考察②（稲垣） 6.20世紀の弦楽器作品と現代特殊奏法についての考察①（斎藤） 7.20世紀の弦楽器作品と現代特殊奏法についての考察②（斎藤） 8.20世紀の管楽器作品と現代特殊奏法についての考察①（清水） 9.20世紀の管楽器作品と現代特殊奏法についての考察②（清水） 10.20世紀の打楽器作品と現代特殊奏法についての考察①（中谷） 11.20世紀の打楽器作品と現代特殊奏法についての考察②（中谷） 12.オーケストラにおける楽器編成と演奏法の変遷についての考察①（斎藤、清水、中谷） 13.オーケストラにおける楽器編成と演奏法の変遷についての考察②（斎藤、清水、中谷） 14.20世紀のオペラにおける声楽と器楽の関係性と変遷についての考察①（稲垣、泉） 15.20世紀のオペラにおける声楽と器楽の関係性と変遷についての考察②（稲垣、泉） 16.ライブ・エレクトロニクスについての考察（稲垣・有馬） 17.ライブ・エレクトロニクス研究演習（稲垣・有馬） 18.バロック作品の研究演習①（斎藤） 19.バロック作品の研究演習②（斎藤） 20.古典派作品の研究演習①（斎藤） 21.古典派作品の研究演習②（斎藤） 22.ロマン派作品の研究演習①（清水） 23.ロマン派作品の研究演習②（清水） 24.近代作品の研究演習①（稲垣） 25.近代作品の研究演習②（稲垣） 26.20世紀作品の研究演習①（稲垣） 27.20世紀作品の研究演習②（稲垣） 28.研究発表①（稲垣・斎藤・清水・中谷・泉） 29.研究発表②（稲垣・斎藤・清水・中谷・泉） 30.総まとめ（稲垣）	
評価方法 (合計100%)	演奏実習と研究発表（70%） 講義中の積極性（30%）	
失格条件	なし	
予習・復習の準備 学習などのアドバイス	なし	
課題へのフィード バック	なし	
教科書	演習中に適宜紹介する。また、必要に応じてその都度、楽譜等を配布する。	
著者名		
出版社		
参考書		
その他	「演奏理論特別演習Ⅱ」の単位を修得した者に限る。	
備考		
科目生への開講	なし	

ナンバリング		期間	通年
授業科目名	作品分析特別演習 I		
英訳科目名	Special Seminar in Analysis I		
担当教員名	松本 直祐樹		
ディプロマ・ポリシー1		ディプロマ・ポリシー2	
ディプロマ・ポリシー3		ディプロマ・ポリシー4	
ディプロマ・ポリシー5		ディプロマ・ポリシー6	
授業概要・ポイント	数ある音楽の規則の中で、とりわけ重要な楽曲のform（時代背景に基づく形式）を確認しながら諸作品の分析を進める。ルネサンス期の対位法的楽曲から後期バロックまでの変遷を踏まえた分析、また時代としては短い、楽曲において代表的な形式が誕生した古典派音楽の分析、前期ロマン派における文芸と音楽の連関などを作品分析の対象とする。一般に分析とは、主に時間的構造および音高的構造を明らかにすることを意味するが、本演習では音律や楽器学にも言及して、当時の音楽像をより明らかにする。		
到達目標	作曲家として必要不可欠な伝統音楽の構造を知り、自己の創作に反映することを目標とする。		
授業計画	<ol style="list-style-type: none"> 1.楽曲を分析する意味（授業の導入） 2.Johannes Ockeghem作品分析（1）数比と時間① 3.Johannes Ockeghem作品分析（2）数比と時間② 4.Johannes Ockeghem作品分析（3）数比と音高① 5.Johannes Ockeghem作品分析（4）数比と音高② 6.Claudio Monteverdi 作品分析（1）楽器法① 7.Claudio Monteverdi 作品分析（2）楽器法② 8.Claudio Monteverdi 作品分析（3）モノディ① 9.Claudio Monteverdi 作品分析（4）モノディ② 10.Johann Sebastian Bach 作品分析（1）音律① 11.Johann Sebastian Bach 作品分析（2）音律② 12.Johann Sebastian Bach 作品分析（3）フーガ① 13.Johann Sebastian Bach 作品分析（4）フーガ② 14.Joseph Haydn 作品分析（1）形式① 15.Joseph Haydn 作品分析（2）形式② 16.Joseph Haydn 作品分析（3）主題の対比① 17.Joseph Haydn 作品分析（4）主題の対比② 18.Ludwig van Beethoven 作品分析（1）動機① 19.Ludwig van Beethoven 作品分析（2）動機② 20.Ludwig van Beethoven 作品分析（3）形式① 21.Ludwig van Beethoven 作品分析（4）形式② 22.Ludwig van Beethoven 作品分析（5）管弦楽法① 23.Ludwig van Beethoven 作品分析（6）管弦楽法② 24.Frederic Chopin 作品分析（1）半音階的旋律① 25.Frederic Chopin 作品分析（2）半音階的旋律② 26.Frederic Chopin 作品分析（3）和声法（和声進行）① 27.Frederic Chopin 作品分析（4）和声法（和声進行）② 28.Frederic Chopin 作品分析（5）和声法（非和声音）① 29.Frederic Chopin 作品分析（6）和声法（非和声音）② 30.まとめ 		
評価方法 (合計100%)	課題レポート50% 授業の参加態度50%		
失格条件	なし		
予習・復讐の準備 学習などのアドバイス	なし		
課題へのフィード バック	なし		
教科書	授業内で適宜指示する。		
著者名			
出版社			
参考書			
その他			
備考			
科目生への開講	なし		

ナンバリング		期間	通年
授業科目名	作品分析特別演習Ⅱ		
英訳科目名	Special Seminar in Analysis II		
担当教員名	松本 直祐樹		
ディプロマ・ポリシー1		ディプロマ・ポリシー2	
ディプロマ・ポリシー3		ディプロマ・ポリシー4	
ディプロマ・ポリシー5		ディプロマ・ポリシー6	
授業概要・ポイント	作品分析特別演習Ⅰの継続として、前期ロマン派の声楽曲から後期ロマン派の管弦楽曲、近代音楽の諸作品を分析の対象とする。特に後期ロマン派において飽和状態に達する和声法の分析、大規模化する管弦楽法の分析を行う。また受講者が実際に研究している作品の分析を試みることにより、研究の進捗を促す。本演習では音響学にも言及して、管弦楽法を基礎とした音色的構造やダイナミクスの配置、分析の最終目標である楽曲の美学を探求する。		
到達目標	作曲家として必要不可欠な伝統音楽の構造を知り、自己の創作に反映することを目標とする。		
授業計画	<ol style="list-style-type: none"> 1. Robert Schumann 作品分析 (1) 文芸と声楽 ① 2. Robert Schumann 作品分析 (2) 文芸と声楽 ② 3. Robert Schumann 作品分析 (3) 文芸と動機 ① 4. Robert Schumann 作品分析 (4) 文芸と動機 ② 5. Richard Wagner 作品分析 (1) 和声法 (非和声音) ① 6. Richard Wagner 作品分析 (2) 和声法 (非和声音) ② 7. Richard Wagner 作品分析 (3) 和声法 (遠隔転調) ① 8. Richard Wagner 作品分析 (4) 和声法 (遠隔転調) ② 9. Richard Wagner 作品分析 (5) 管弦楽法 ① 10. Richard Wagner 作品分析 (6) 管弦楽法 ② 11. Claude Debussy 作品分析 (1) 民族音楽と旋法 ① 12. Claude Debussy 作品分析 (2) 民族音楽と旋法 ② 13. Claude Debussy 作品分析 (3) 管弦楽法 ① 14. Claude Debussy 作品分析 (4) 管弦楽法 ② 15. Anton Webern 作品分析 (1) 音色旋律 ① 16. Anton Webern 作品分析 (2) 音色旋律 ② 17. Anton Webern 作品分析 (3) セリー ① 18. Anton Webern 作品分析 (4) セリー ② 19. Igor Stravinsky 作品分析 (1) リズム ① 20. Igor Stravinsky 作品分析 (2) リズム ② 21. Igor Stravinsky 作品分析 (3) 複調 ① 22. Igor Stravinsky 作品分析 (4) 複調 ② 23. Olivier Messiaen 作品分析 (1) 旋法と和声法 ① 24. Olivier Messiaen 作品分析 (2) 旋法と和声法 ② 25. Pierre Boulez 作品分析 (1) テクノロジー ① 26. Pierre Boulez 作品分析 (2) テクノロジー ② 27. Iannis Xenakis 作品分析 (1) グラフと確率 ① 28. Iannis Xenakis 作品分析 (2) グラフと確率 ② 29. Gerard Grisey 作品分析 (1) 倍音、微分音 ① 30. Gerard Grisey 作品分析 (2) 倍音、微分音 ② 		
評価方法 (合計100%)	課題レポート50% 授業の参加態度50%		
失格条件	なし		
予習・復習の準備 学習などのアドバイス	なし		
課題へのフィード バック	なし		
教科書	授業内で適宜指示する。		
著者名			
出版社			
参考書			
その他			
備考			
科目生への開講	なし		

10-021

ナンバリング		期間	通年
授業科目名	西洋音楽史特別演習 A		
英訳科目名	Research on History of Western Art Music A		
担当教員名	黒坂 俊昭		
ディプロマ・ポリシー1		ディプロマ・ポリシー2	
ディプロマ・ポリシー3		ディプロマ・ポリシー4	
ディプロマ・ポリシー5		ディプロマ・ポリシー6	
授業概要・ポイント	西洋芸術音楽の中でオペラの歴史は、最も華やかであるばかりか、最も歴史的に重要である。音楽劇が後のオペラの属性を持ち始めたバロック初期のオペラの誕生から、ナポリ楽派のオペラと呼ばれるバロック・オペラ、ウィーン古典派のオペラを経て、19世紀のオペラへと連なる歴史を西洋の音楽文化の視座から考察する。特に19世紀のイタリア・ロマン派オペラは、心理描写や異国趣味に見られるロマン主義や、リソルジメントに関わる政治主張など、19世紀社会・文化の把握に不可欠であり、音楽生活のみならず政治・社会史の視点から読み直し分析する。		
到達目標	オペラの歴史を通して西洋の音楽文化を理解できるようになる。		
授業計画	<ol style="list-style-type: none"> 1.西洋芸術音楽の歴史的概観（概説） 2.西洋芸術音楽の歴史的概観（各論） 3.オペラの歴史の展開（概説） 4.オペラの歴史の展開（各論） 5.オペラの誕生に係る社会的条件、経済的条件、音楽理論的条件（概説） 6.オペラの誕生に係る社会的条件、経済的条件、音楽理論的条件（分析） 7.ナポリ楽派のオペラの趣味（概説） 8.ナポリ楽派のオペラの趣味（各論） 9.ナポリ楽派のオペラの形式（概説） 10.ナポリ楽派のオペラの形式（分析） 11.ウィーン古典派のオペラ史的位置（概説） 12.ウィーン古典派のオペラ史的位置（各論） 13.ウィーン古典派のオペラの古典主義（概説） 14.ウィーン古典派のオペラの古典主義（分析） 15.ロマン派・イタリアオペラの題材① 16.ロマン派・イタリアオペラの題材② 17.ロマン派・イタリアオペラとリソルジメント（概説） 18.ロマン派・イタリアオペラとリソルジメント（各論） 19.ロマン派・イタリアオペラの主題① 20.ロマン派・イタリアオペラの主題② 21.ヴェリズモ・オペラとオペラの終焉（概説） 22.ヴェリズモ・オペラとオペラの終焉（分析） 23.オペラの表現（各論） 24.オペラの表現（総論） 25.オペラの時間（各論） 26.オペラの時間（総論） 27.オペラの属性（各論） 28.オペラの属性（総論） 29.オペラと文化（各論） 30.オペラと文化（総論） 		
評価方法 (合計100%)	授業参加への積極性30% 提出レポートの内容70%		
失格条件	なし		
予習・復讐の準備 学習などのアドバイス	なし		
課題へのフィード バック	なし		
教科書	なし		
著者名			
出版社			
参考書			
その他			
備考			
科目生への開講	なし		

ナンバリング		期間	通年
授業科目名	西洋音楽史特別演習 B		
英訳科目名	Research on History of Western Art Music B		
担当教員名	黒坂 俊昭		
ディプロマ・ポリシー1		ディプロマ・ポリシー2	
ディプロマ・ポリシー3		ディプロマ・ポリシー4	
ディプロマ・ポリシー5		ディプロマ・ポリシー6	
授業概要・ポイント	ヨーロッパの文化・芸術の中で中心的な一つのジャンルである音楽の歴史は、概ね西欧の音楽によって形成されてきた。しかし中欧に位置するポーランドにも独自の音楽の歴史が存在している。そこでは国家のキリスト教化に伴うローマ・カトリックの聖歌の受容に始まり、イタリアとの関係を保ちながら中世・ルネサンス期・バロック期を経てきた。その関係はイタリアからポーランドへの一方であるかのように見えるが、決してポーランドからイタリアへの影響関係も見逃すことができない。この中心と周辺の問題を保ちながら、現在まで独自の展開を示し続けるポーランドの音楽についてその歴史的諸相を分析し解説する。		
到達目標	ポーランド音楽史を理解し、西欧音楽による音楽史を再認識できるようになる。		
授業計画	<ol style="list-style-type: none"> 1. ポーランドの位置的概観と歴史的概観（概説） 2. ポーランドの位置的概観と歴史的概観（各論） 3. ポーランド音楽の歴史的展開（概説） 4. ポーランド音楽の歴史的展開（各論） 5. ポーランド音楽と西欧音楽の関係の歴史（概説） 6. ポーランド音楽と西欧音楽の関係の歴史（各論） 7. ポーランドのキリスト教化とグレゴリウス聖歌の受容（概説） 8. ポーランドのキリスト教化とグレゴリウス聖歌の受容（各論） 9. 修道院における聖歌の発展（概説） 10. 修道院における聖歌の発展（各論） 11. ポーランドにおける多声音楽の誕生（概説） 12. ポーランドにおける多声音楽の誕生（各論） 13. ルネサンス期の三様式（概説） 14. ルネサンス期の三様式（各論） 15. 宗教的寛容と音楽（概説） 16. 宗教的寛容と音楽（各論） 17. ポーランドのバロック音楽の特徴（概説） 18. ポーランドのバロック音楽の特徴（各論） 19. ポロネーズの誕生（概説） 20. ポロネーズの誕生（資料調査） 21. ショパンのレジスタンス精神と音楽（概説） 22. ショパンのレジスタンス精神と音楽（分析） 23. 分割時代のポーランド音楽（概説） 24. 分割時代のポーランド音楽（分析） 25. シマノフスキのロマン主義（概説） 26. シマノフスキのロマン主義（分析） 27. ペンデレツキの目指す音楽（概説） 28. ペンデレツキの目指す音楽（分析） 29. ポーランド音楽史の概括（各論） 30. ポーランド音楽史の概括（総括） 		
評価方法 (合計100%)	授業参加への積極性30% 提出レポートの内容70%		
失格条件	なし		
予習・復讐の準備 学習などのアドバイス	なし		
課題へのフィード バック	なし		
教科書	なし		
著者名			
出版社			
参考書			
その他			
備考			
科目生への開講	なし		

ナンバリング		期間	通年
授業科目名	副科特別実技 I		
英訳科目名	Special Secondary Performance I		
担当教員名	黒坂 俊昭、泉 貴子		
ディプロマ・ポリシー-1		ディプロマ・ポリシー-2	
ディプロマ・ポリシー-3		ディプロマ・ポリシー-4	
ディプロマ・ポリシー-5		ディプロマ・ポリシー-6	
授業概要・ポイント	各研究生の専門領域を研鑽するために必要と認められた領域の実技レッスンを開講する。一例に音楽学領域を専門とする者が、修士論文のテーマが歌曲に関連する場合に、論文執筆者自身が歌曲のレッスンを受講することで、その研究の幅に厚みを増すなどの目的が確認された場合などに研究科委員会の審議を経て受講を許可する。1レッスンは45分を原則とする。		
到達目標	それぞれの発声法や楽器奏法等を理解し、一定レベルの楽曲を演奏できることを目的とする。		
授業計画	<ol style="list-style-type: none"> 1.オリエンテーション、基本的要素の確認 2.奏法の充実① 発声法・器楽奏法の基礎 3.奏法の充実② 演奏に取り入れる呼吸法 4.奏法の充実③ 声域・各楽器の特徴の確認 5.研究に必要となる楽曲aの選定 6.研究に必要となる楽曲aの譜読み 7.研究に必要となる楽曲aの鑑賞 8.研究に必要となる楽曲aの楽曲分析 9.研究に必要となる楽曲aの歴史的背景 10.研究に必要となる楽曲aのテンポ設定についての考察 11.研究に必要となる楽曲aの表現方法 12.研究に必要となる楽曲aの表現とテンポの関連性 13.研究に必要となる楽曲aの表現と音色の関連性 14.研究に必要となる楽曲aのまとめ 15.研究に必要となる楽曲aの演奏発表 16.研究に必要となる楽曲aの研究レポート作成 17.研究に必要となる楽曲aの研究レポート発表 18.研究に必要となる楽曲bの選定 19.研究に必要となる楽曲bの譜読み 20.研究に必要となる楽曲bの鑑賞 21.研究に必要となる楽曲bの楽曲分析 22.研究に必要となる楽曲bの歴史的背景 23.研究に必要となる楽曲bのテンポ設定についての考察 24.研究に必要となる楽曲bの表現方法 25.研究に必要となる楽曲bの表現とテンポの関連性 26.研究に必要となる楽曲bの表現と音色の関連性 27.研究に必要となる楽曲bのまとめ 28.研究に必要となる楽曲bの演奏発表 29.研究に必要となる楽曲bの研究レポート作成 30.研究に必要となる楽曲bの研究レポート発表 		
評価方法 (合計100%)	実技試験80%、レッスンに向けた積極性20%		
失格条件	なし		
予習・復讐の準備 学習などのアドバイス	なし		
課題へのフィード バック	なし		
教科書	授業内で案内する。また、必要に応じて楽譜等を配布する。		
著者名			
出版社			
参考書			
その他			
備考			
科目生への開講	なし		

ナンバリング		期間	通年
授業科目名	副科特別実技Ⅱ		
英訳科目名	Special Secondary Performance Ⅱ		
担当教員名	黒坂 俊昭、泉 貴子		
ディプロマ・ポリシー1		ディプロマ・ポリシー2	
ディプロマ・ポリシー3		ディプロマ・ポリシー4	
ディプロマ・ポリシー5		ディプロマ・ポリシー6	
授業概要・ポイント	副科特別実技Ⅰを礎とし、専門領域の研究の深化に資するために更なる専門領域の研鑽に必要と認められた場合などに研究科委員会の審議を経て受講を許可する。1レッスンは45分を原則とする。		
到達目標	発声法やそれぞれの楽器奏法等を理解し、一定レベルの楽曲を演奏・表現できることを目的とする。		
授業計画	<ol style="list-style-type: none"> 1.オリエンテーション、副科特別実技1に基づく基本的要素の確認 2.奏法の充実① 技術向上のための演奏テクニックの考察1 3.奏法の充実② 技術向上のための演奏テクニックの考察2 4.奏法の充実③ 表現力についての考察 5.研究に必要となる楽曲cの選定 6.研究に必要となる楽曲cの譜読み 7.研究に必要となる楽曲cの鑑賞 8.研究に必要となる楽曲cの楽曲分析 9.研究に必要となる楽曲cの歴史的背景 10.研究に必要となる楽曲cのテンポ設定についての考察 11.研究に必要となる楽曲cの表現方法 12.研究に必要となる楽曲cの表現とテンポの関連性 13.研究に必要となる楽曲cの表現と音色の関連性 14.研究に必要となる楽曲cのまとめ 15.研究に必要となる楽曲cの演奏発表 16.研究に必要となる楽曲cの研究レポート作成 17.研究に必要となる楽曲cの研究レポート発表 18.研究に必要となる楽曲dの選定 19.研究に必要となる楽曲dの譜読み 20.研究に必要となる楽曲dの鑑賞 21.研究に必要となる楽曲dの楽曲分析 22.研究に必要となる楽曲dの歴史的背景 23.研究に必要となる楽曲dのテンポ設定についての考察 24.研究に必要となる楽曲dの表現方法 25.研究に必要となる楽曲dの表現とテンポの関連性 26.研究に必要となる楽曲dの表現と音色の関連性 27.研究に必要となる楽曲dのまとめ 28.研究に必要となる楽曲dの演奏発表 29.研究に必要となる楽曲dの研究レポート作成 30.研究に必要となる楽曲dの研究レポート発表 		
評価方法 (合計100%)	実技試験80%、レッスンに向けた積極性20%		
失格条件	なし		
予習・復讐の準備 学習などのアドバイス	なし		
課題へのフィード バック	なし		
教科書	授業内で案内する。また、必要に応じて楽譜等を配布する。		
著者名			
出版社			
参考書			
その他	「副科特別実技Ⅰ」の単位を修得した者で、研究科委員会の審議を経て受講が認められた者		
備考			
科目生への開講	なし		

ナンバリング	期間	通年
授業科目名	声楽専門実技 I	
英訳科目名	Applied Music (Voice) I	
担当教員名	声楽部門	
ディプロマ・ポリシー1	ディプロマ・ポリシー2	
ディプロマ・ポリシー3	ディプロマ・ポリシー4	
ディプロマ・ポリシー5	ディプロマ・ポリシー6	
授業概要・ポイント	詩の読解、舞台語発音、作品解釈、歌唱、表現方法について学ぶ。 履修者の声にあった作品を選び、上記にあげた様々な観点から演奏技術の上達を目指し、また修了演奏作品も研究課題として取り入れる。	
到達目標	声楽家として舞台上で演奏するのに必要な高度な歌唱技術の向上を目指し、作品を深く考察し解釈すること、また表現力の幅を広げていくことを修得する。	
授業計画	1.オリエンテーション 1年間の研究課題（修了演奏を視野に入れて）を教員と相談する。 2.研究課題1ー① 作曲家・作品についての考察 3.研究課題1ー② ディクッション 4.研究課題1ー③ ディクッションと作品解釈 5.研究課題1ー④ 作品解釈 6.研究課題1ー⑤ 作品解釈 7.研究課題1ー⑥ まとめ 8.研究課題2ー① 作曲家・作品についての考察 9.研究課題2ー② ディクッション 10.研究課題2ー③ ディクッションと作品解釈 11.研究課題2ー④ 作品解釈 12.研究課題2ー⑤ 作品解釈 13.研究課題2ー⑥ まとめ 14.1年次リサイタル及びオペラ特別演習試演会作品（歌唱演習） 15.1年次リサイタル及びオペラ特別演習試演会作品（歌唱演習） 16.研究課題3ー① 作曲家・作品についての考察 17.研究課題3ー② ディクッション 18.研究課題3ー③ ディクッション 19.研究課題3ー④ 作品解釈 20.研究課題3ー⑤ 作品解釈 21.研究課題3ー⑥ まとめ 22.研究課題4ー① 作曲家・作品についての考察 23.研究課題4ー② ディクッション 24.研究課題4ー③ ディクッション 25.研究課題4ー④ 作品解釈 26.研究課題4ー⑤ 作品解釈 27.研究課題4ー⑥ まとめ 28.リサイタルおよびオペラ特別演習試演会作品の考察1 29.リサイタルおよびオペラ特別演習試演会作品の考察2 30.声楽実技 I まとめ	
評価方法 (合計100%)	実技試験80%、レッスンに取り組む姿勢20%	
失格条件	自主性に任せ、自己管理ができていない前提で考えているので特になし	
予習・復讐の準備 学習などのアドバイス	声楽の演奏技術の向上を目指すのみならず、作品の解釈等深く考察するようにすること。	
課題へのフィード バック	学ぶべき課題を深く考察・理解できているか、各々のレッスンで確認をしながら確実に進めていく。	
教科書	授業内で指示する。	
著者名		
出版社		
参考書		
その他		
備考		
科目生への開講	なし	

ナンバリング	期間	通年
授業科目名	声楽専門実技Ⅱ	
英訳科目名	Applied Music (Voice) Ⅱ	
担当教員名	声楽部門	
ディプロマ・ポリシー1	ディプロマ・ポリシー2	
ディプロマ・ポリシー3	ディプロマ・ポリシー4	
ディプロマ・ポリシー5	ディプロマ・ポリシー6	
授業概要・ポイント	<p>声楽領域の学生で声楽専門実技Ⅰを履修した者を対象に行う。詩の読解、舞台語発音、作品解釈、歌唱、表現方法について学ぶ。</p> <p>履修者の声にあった作品を選び、上記にあげた様々な観点から演奏技術の上達を目指し、また修了演奏作品も研究課題として取り入れる。</p>	
到達目標	<p>声楽家として舞台上で演奏するのに必要な高度な歌唱技術の向上を目指し、作品を深く考察し解釈すること、また表現力の幅を広げていくことを修得する。</p>	
授業計画	<ol style="list-style-type: none"> 1.オリエンテーション 1年間の研究課題（修了演奏を視野に入れて）を教員と相談する。 2.研究課題1ー① 作曲家・作品についての考察 3.研究課題1ー② ディクシオン 4.研究課題1ー③ ディクシオンと作品解釈 5.研究課題1ー④ 作品解釈 6.研究課題1ー⑤ 作品解釈 7.研究課題1ー⑥ まとめ 8.研究課題1ー① 作曲家・作品についての考察 9.研究課題2ー② ディクシオン 10.研究課題2ー③ ディクシオンと作品解釈 11.研究課題2ー④ 作品解釈 12.研究課題2ー⑤ 作品解釈 13.研究課題2ー⑥ まとめ 14.修了演奏作品 15.修了演奏作品 16.研究課題3ー① 作曲家・作品についての考察 17.研究課題3ー② ディクシオン 18.研究課題3ー③ ディクシオン 19.研究課題3ー④ 作品解釈 20.研究課題3ー⑤ 作品解釈 21.研究課題3ー⑥ まとめ 22.研究課題4ー① 作曲家・作品についての考察 23.研究課題4ー② ディクシオン 24.研究課題4ー③ ディクシオン 25.研究課題4ー④ 作品解釈 26.研究課題4ー⑤ 作品解釈 27.研究課題4ー⑥ まとめ 28.修了演奏作品の考察 29.修了演奏作品の考察 30.声楽専門実技Ⅱ まとめ 	
評価方法 (合計100%)	実技試験80%、レッスンに取り組む姿勢20%	
失格条件	自主性をみて出席に関して自己管理ができていないものとみなすため、特になし	
予習・復讐の準備 学習などのアドバイス	修士演奏に向けての準備を早めに取り掛かること、また繰り返し復習・予習を行い有意義なレッスンの時間となるよう準備すること。	
課題へのフィード バック	作品を演奏するにあたり、不明な点、改善すべき方法等、わからないことを担当指導教官と分析し説明していくこと。また作品解釈においても作曲に関して、西洋音楽史に関して等それぞれの側面から分析・解釈が必要な際は各担当教官に教えを乞うようにする。	
教科書	授業内で指示する	
著者名		
出版社		
参考書		
その他	「声楽専門実技Ⅰ」の単位を修得した者に限る。	
備考		
科目生への開講	なし	

10-027

ナンバリング	期間	通年
授業科目名	鍵盤専門実技 I	
英訳科目名	Applied Music (Keyboard) I	
担当教員名	ピアノ 部門	
ディプロマ・ポリシー-1	ディプロマ・ポリシー-2	
ディプロマ・ポリシー-3	ディプロマ・ポリシー-4	
ディプロマ・ポリシー-5	ディプロマ・ポリシー-6	
授業概要・ポイント	研究課題に沿って研究内容と楽曲を明確にし、音楽基礎知識に裏付けされた綿密な読譜力と時代様式を踏まえ、ピアノの演奏技術と音楽表現の可能性について、多角的かつ実践的な演奏研究と音楽的視野を拓けることにより、高度な演奏芸術を研究する。	
到達目標	高度な演奏芸術を研究することによって、自己の演奏能力を高めるとともに、国内外の音楽界・教育界に寄与することができる。	
授業計画	1.年間計画と研究内容・楽曲の決定 2.課題楽曲aの作品分析と演奏法概説 3.課題楽曲aの研究・演奏 (1) 4.課題楽曲aの研究・演奏 (2) 5.課題楽曲aの研究・演奏 (3) 6.課題楽曲bの作品分析と演奏法概説 7.課題楽曲bの研究・演奏 (1) 8.課題楽曲bの研究・演奏 (2) 9.課題楽曲bの研究・演奏 (3) 10.課題楽曲cの作品分析と演奏法概説 11.課題楽曲cの研究・演奏 (1) 12.課題楽曲cの研究・演奏 (2) 13.課題楽曲cの研究・演奏 (3) 14.課題楽曲a、b、cの研究・演奏の総まとめと討論 (1) 15.課題楽曲a、b、cの研究・演奏の総まとめと討論 (2) 16.課題楽曲dの作品分析と演奏法概説 17.課題楽曲dの研究・演奏 (1) 18.課題楽曲dの研究・演奏 (2) 19.課題楽曲dの研究・演奏 (3) 20.課題楽曲eの作品分析と演奏法概説 21.課題楽曲eの研究・演奏 (1) 22.課題楽曲eの研究・演奏 (2) 23.課題楽曲eの研究・演奏 (3) 24.課題楽曲d、eの研究・演奏の総まとめと討論 (1) 25.課題楽曲d、eの研究・演奏の総まとめと討論 (2) 26.任意の楽曲研究レポート製作 27.楽曲研究レポートについての討論 28.研究レポートと演奏発表の試演 29.研究レポートと演奏発表 30.鍵盤専門実技 I の課題楽曲の研究成果の確認	
評価方法 (合計100%)	実技試験80%、レッスンに対する積極性20%	
失格条件	なし	
予習・復讐の準備 学習などのアドバイス	なし	
課題へのフィード バック	なし	
教科書	授業内で指示する。	
著者名		
出版社		
参考書		
その他		
備考		
科目生への開講	なし	

10-028

ナンバリング		期間	通年
授業科目名	鍵盤専門実技Ⅱ		
英訳科目名	Applied Music (Keyboard) Ⅱ		
担当教員名	ピアノ部門		
ディプロマ・ポリシー1		ディプロマ・ポリシー2	
ディプロマ・ポリシー3		ディプロマ・ポリシー4	
ディプロマ・ポリシー5		ディプロマ・ポリシー6	
授業概要・ポイント	研究課題と計画を再認識し、鍵盤専門実技Ⅰで研究した内容に基づいて、さらなる学修展開と研鑽によって、ピアノ作品における高度な演奏芸術を研究することを目的とする。また、各種演奏会の企画や進行、プログラミングについても考察する。		
到達目標	高度な演奏芸術を研究することによって、自己の演奏能力を高めるとともに、国内外の音楽界・教育界に寄与することができる。		
授業計画	<ol style="list-style-type: none"> 1.年間計画と研究内容・楽曲の決定 2.課題楽曲fの作品分析と演奏法概説 3.課題楽曲fの研究・演奏 (1) 4.課題楽曲fの研究・演奏 (2) 5.課題楽曲fの研究・演奏 (3) 6.課題楽曲fの研究・演奏 (4) 7.課題楽曲gの作品分析と演奏法概説 8.課題楽曲gの研究・演奏 (1) 9.課題楽曲gの研究・演奏 (2) 10.課題楽曲gの研究・演奏 (3) 11.課題楽曲gの研究・演奏 (4) 12.課題楽曲f、gの研究・演奏の総まとめと討論 (1) 13.課題楽曲f、gの研究・演奏の総まとめと討論 (2) 14.演奏会の企画とプログラミングについての考察 15.リサイタルプログラム内容の検討と進行について 16.リサイタルプログラム研究と演習 (1) 17.リサイタルプログラム研究と演習 (2) 18.リサイタルプログラム研究と演習 (3) 19.リサイタルプログラム研究と演習 (4) 20.リサイタル・プログラムノートの研究と作成 21.リサイタルプログラム研究と演習 (5) 22.リサイタルプログラム研究と演習 (6) 23.リサイタルプログラム研究と演習 (7) 24.リサイタルプログラム研究と演習 (8) 25.リサイタル演奏発表当日の流れと確認 26.リサイタル演奏発表の試演 (1) 27.リサイタル演奏発表の試演 (2) 28.リサイタル演奏発表の試演 (3) 29.リサイタル演奏発表 30.研究成果についての確認 		
評価方法 (合計100%)	実技試験80%、レッスンに対する積極性20%		
失格条件	なし		
予習・復讐の準備 学習などのアドバイス	なし		
課題へのフィード バック	なし		
教科書	授業内で指示する。		
著者名			
出版社			
参考書			
その他	「鍵盤専門実技Ⅰ」の単位を修得した者に限る。		
備考			
科目生への開講	なし		

10-029

ナンバリング		期間	通年
授業科目名	器楽専門実技 I (管楽器)		
英訳科目名	Applied music (Orchestral Instruments) I		
担当教員名	管弦打部門		
ディプロマ・ポリシー1		ディプロマ・ポリシー2	
ディプロマ・ポリシー3		ディプロマ・ポリシー4	
ディプロマ・ポリシー5		ディプロマ・ポリシー6	
授業概要・ポイント	演奏技術についてはさらなる改善・改良とその練磨によってレベル・アップをはかり、表現力を高め、文献や綿密な読譜力をもとに時代に即応した演奏解釈を明確化する。バロック・古典から現代に至るまでの多様な楽曲の中から、学生それぞれの演奏力を高めると判断される適切な楽曲を選び、音楽史的な視点を踏まえて時代の様式に基づいた演奏能力を高めていく。		
到達目標	演奏には自ずと個々の持ち味が表れるが、それらに普遍性を持たせた個性を見出していくことを目指す。		
授業計画	1.年間の学習計画 2.演奏技術の再確認 3.音色の作り方 4.表現と演奏技術の関連 5.音楽史時代別楽器構造の変遷と討論 6.音楽史時代別の演奏法概要と討論 7.バロック以前の楽曲の研究・演奏 8.バロック時代の協奏曲の研究・演奏 9.バロック合奏曲の研究・演奏 10.古典派協奏曲の研究・演奏 11.古典派合奏曲の研究・演奏 (1) 12.古典派合奏曲の研究・演奏 (2) 13.ロマン派協奏曲の研究・演奏 14.ロマン派合奏曲の研究・演奏 (1) 15.ロマン派合奏曲の研究・演奏 (2) 16.音楽圏別演奏法・指導法の研究と討論 17.楽曲のジャンル別演奏法の概要と討論 18.近代協奏曲・独奏曲の研究・演奏 (1) 19.近代協奏曲・独奏曲の研究・演奏 (2) 20.近代合奏曲の研究・演奏 21.現代独奏曲の研究・演奏 22.現代無伴奏独奏曲の研究・演奏 23.現代合奏曲の研究・演奏 24.ジャンル別室内楽曲の演奏法と討論 25.古楽器における室内楽曲の研究・演奏 26.現代楽器における室内楽曲の研究・演奏 27.金管楽器以外との室内楽曲の研究・演奏 28.任意の楽曲研究レポート作成 29.研究レポート発表 30.発表演奏		
評価方法 (合計100%)	実技試験80%、レッスンに向けた積極性20%		
失格条件	なし		
予習・復讐の準備 学習などのアドバイス	楽曲の歴史的背景を研究する。		
課題へのフィード バック	実技試験の採点者(教員)がコメントを記述。受講者に個別に配布する。		
教科書	授業内で指示する。		
著者名			
出版社			
参考書			
その他			
備考			
科目生への開講	なし		

10-030

ナンバリング	期間	通年
授業科目名	器楽専門実技 I (弦楽器)	
英訳科目名	Applied music (Orchestral Instruments) I	
担当教員名	管弦打部門	
ディプロマ・ポリシー1	ディプロマ・ポリシー2	
ディプロマ・ポリシー3	ディプロマ・ポリシー4	
ディプロマ・ポリシー5	ディプロマ・ポリシー6	
授業概要・ポイント	演奏技術についてはさらなる改善・改良とその練磨によってレベル・アップをはかり、表現力を高め、文献や綿密な読譜力をもとに時代に即応した演奏解釈を明確化する。バロック・古典から現代に至るまでの多様な楽曲の中から、学生それぞれの演奏力を高めると判断される適切な楽曲を選び、音楽史的な視点を踏まえて時代の様式の理解に基づいた演奏能力を高めていく。	
到達目標	演奏には自ずと個々の持ち味が表れるが、それらに普遍性を持たせた個性を見出していくことを目指す。	
授業計画	1.年間の学習計画 2.演奏技術の再確認 3.音色の作り方 4.表現と演奏技術の関連 5.音楽史時代別の演奏法概要と討論 6.J.S.バッハ：無伴奏曲の研究・演奏 (1) 7.J.S.バッハ：無伴奏曲の研究・演奏 (2) 8.J.S.バッハ：無伴奏曲の研究・演奏 (3) 9.古典派の楽曲の研究・演奏 (1) 10.古典派の楽曲の研究・演奏 (2) 11.古典派の楽曲の研究・演奏 (3) 12.ロマン派の楽曲の研究・演奏 (1) 13.ロマン派の楽曲の研究・演奏 (2) 14.ロマン派の楽曲の研究・演奏 (3) 15.近代フランスの楽曲の研究・演奏 (1) 16.近代フランスの楽曲の研究・演奏 (2) 17.近代フランスの楽曲の研究・演奏 (3) 18.現代曲の研究・演奏 (1) 19.現代曲の研究・演奏 (2) 20.現代曲の研究・演奏 (3) 21.楽曲のジャンル別演奏法の概要と討論 22.協奏曲の研究・演奏 (1) 23.協奏曲の研究・演奏 (2) 24.協奏曲の研究・演奏 (3) 25.二重奏ソナタの研究・演奏 (1) 26.二重奏ソナタの研究・演奏 (2) 27.二重奏ソナタの研究・演奏 (3) 28.任意の楽曲研究レポート制作 29.研究レポート発表 30.発表演奏	
評価方法 (合計100%)	実技試験80%、レッスンに向けた積極性20%	
失格条件	なし	
予習・復讐の準備 学習などのアドバイス	譜読み、及びフィンガリング、ボーイングの設定と再検討。学習する楽曲の歴史的背景の研究。	
課題へのフィード バック	実技試験を採点する教員が各々の演奏についての講評を用紙に記入し、試験後に受験学生に個別に配布する。	
教科書	授業内で指示する。	
著者名		
出版社		
参考書		
その他		
備考		
科目生への開講	なし	

ナンバリング		期間	通年
授業科目名	器楽専門実技 I (打楽器)		
英訳科目名	Applied music (Orchestral Instruments) I		
担当教員名	管弦打部門		
ディプロマ・ポリシー1		ディプロマ・ポリシー2	
ディプロマ・ポリシー3		ディプロマ・ポリシー4	
ディプロマ・ポリシー5		ディプロマ・ポリシー6	
授業概要・ポイント	演奏技術についてはさらなる改善・改良とその練磨によってレベル・アップをはかり、表現力を高め、文献や綿密な読譜力をもとに時代に即応した演奏解釈を明確化する。バロック・古典から現代に至るまでの多様な楽曲の中から、学生それぞれの演奏力を高めると判断される適切な楽曲を選び、音楽史的な視点を踏まえて時代の様式の理解に基づいた演奏能力を高めていく。		
到達目標	演奏には自ずと個々の持ち味が表れるが、それらに普遍性を持たせた個性を見出していくことを目指す。		
授業計画	1.年間の学習計画（オリエンテーション） 2.基礎奏法と演奏法の確認 3.楽曲1と2（バッハなど古典作品を含む）の実技演習：楽曲分析 4.楽曲1と2の実技演習：作曲家と作品の背景研究 5.楽曲1と2の実技演習：解釈と演奏法の研究（1） 6.楽曲1と2の実技演習：解釈と演奏法の研究（2） 7.楽曲1と2の実技演習：解釈と演奏法の研究（3） 8.楽曲1と2の実技演習：まとめ 9.オーケストラ・スタディの演習：小太鼓・鍵盤楽器（1） 10.オーケストラ・スタディの演習：小太鼓・鍵盤楽器（2） 11.オーケストラ・スタディの演習：ティンパニ・打楽器（1） 12.オーケストラ・スタディの演習：ティンパニ・打楽器（2） 13.オーケストラ・スタディの演習：まとめ 14.アンサンブル作品の演習：作品と作曲家の研究 15.アンサンブル作品の演習：セッティングや音響効果の研究 16.アンサンブル作品の演習：まとめ 17.楽曲3と4の実技演習：作曲家と作品の背景研究 18.楽曲3と4の実技演習：解釈と演奏法の研究（1） 19.楽曲3と4の実技演習：解釈と演奏法の研究（2） 20.楽曲3と4の実技演習：解釈と演奏法の研究（3） 21.楽曲3と4の実技演習：まとめ 22.打楽器協奏曲作品の演習：作曲家と作品の背景研究 23.打楽器協奏曲作品の演習：解釈と演奏法の研究（1） 24.打楽器協奏曲作品の演習：解釈と演奏法の研究（2） 25.打楽器協奏曲作品の演習：解釈と演奏法の研究（3） 26.打楽器協奏曲作品の演習：解釈と演奏法の研究（4） 27.打楽器協奏曲作品の演習：まとめ 28.楽曲1と2の作品研究レポート 29.打楽器協奏曲の作品研究レポート 30.楽曲3と4の作品研究レポート		
評価方法 (合計100%)	実技試験50%、研究レポート30%、レッスンに向けた積極性20%		
失格条件	なし		
予習・復讐の準備 学習などのアドバイス	なし		
課題へのフィード バック	なし		
教科書	授業内で指示する。		
著者名			
出版社			
参考書			
その他			
備考			
科目生への開講	なし		

ナンバリング		期間	通年
授業科目名	器楽専門実技Ⅱ（管楽器）		
英訳科目名	Applied music (Orchestral Instruments) Ⅱ		
担当教員名	管弦打部門		
ディプロマ・ポリシー1		ディプロマ・ポリシー2	
ディプロマ・ポリシー3		ディプロマ・ポリシー4	
ディプロマ・ポリシー5		ディプロマ・ポリシー6	
授業概要・ポイント	器楽専門実技Ⅰで習得したものを基に、さらに次元の高いものに展開させるべく研鑽を積んでいく。音楽の古典から現代に至る様式の変遷を鑑みること、また諸国のさまざまな地域の楽曲群に接し、その諸相についてそれぞれの特色を自己の演奏に反映させる。さらに個人および団体（オーケストラ）の演奏における対応力、指導法研究、ステージでの所作や演奏会を企画および進行させる取り組み等々、さまざまな社会的要請に対応しうる能力を養う。		
到達目標	演奏家として舞台上で演奏するのに必要な高度な演奏技能の向上をめざし、作品を深く考察し、いかしくすること、また表現力の幅を広げていくことを修得する。		
授業計画	<ol style="list-style-type: none"> 1.年間の学習計画と器楽専門実技Ⅰの振り返り 2.リサイタル・プログラム構築の仕方 3.国別の独奏楽曲演奏法概論と討論 4.国別の合奏楽曲演奏法概論と討論 5.国別の指導法概論と討論（1） 6.国別の指導法概論と討論（2） 7.イタリア音楽の研究・演奏（1） 8.イタリア音楽の研究・演奏（2） 9.ドイツ音楽の研究・演奏（1） 10.ドイツ音楽の研究・演奏（2） 11.フランス音楽の研究・演奏（1） 12.フランス音楽の研究・演奏（2） 13.イギリス音楽の研究・演奏（1） 14.イギリス音楽の研究・演奏（2） 15.ロシア音楽の研究・演奏（1） 16.ロシア音楽の研究・演奏（2） 17.北欧音楽の研究・演奏（1） 18.北欧音楽の研究・演奏（2） 19.東欧音楽の研究・演奏 20.アメリカ音楽の研究・演奏（1） 21.アメリカ音楽の研究・演奏（2） 22.邦人作品の研究・演奏（1） 23.邦人作品の研究・演奏（2） 24.リサイタル・プログラムノート作成 25.リサイタル・プログラムノート発表 26.個人指導法研究 27.合奏指導法研究 28.トーク付きコンサートの進め方 29.ステージマナー等、演奏の現場での全体の所作 30.発表演奏 		
評価方法 (合計100%)	実技試験80%、レッスンに向けた積極性20%		
失格条件	なし		
予習・復讐の準備 学習などのアドバイス	なし		
課題へのフィード バック	なし		
教科書	授業内で指示する。		
著者名			
出版社			
参考書			
その他	「器楽専門実技Ⅰ」（管楽器）の単位を修得した者に限る。		
備考			
科目生への開講	なし		

10-033

ナンバリング		期間	通年
授業科目名	器楽専門実技Ⅱ(弦楽器)		
英訳科目名	Applied music (Orchestral Instruments) Ⅱ		
担当教員名	管弦打部門		
ディプロマ・ポリシー1		ディプロマ・ポリシー2	
ディプロマ・ポリシー3		ディプロマ・ポリシー4	
ディプロマ・ポリシー5		ディプロマ・ポリシー6	
授業概要・ポイント	器楽専門実技Ⅰで習得したものを基に、さらに次元の高いものに展開させるべく研鑽を積んでいく。音楽の古典から現代に至る様式の変遷を鑑みること、また諸国のさまざまな地域の楽曲群に接し、その諸相についてそれぞれの特色を自己の演奏に反映させる。さらに個人および団体(オーケストラ)の演奏における対応力、指導法研究、ステージでの所作や演奏会を企画および進行させる取り組み等々、さまざまな社会的要請に対応しうる能力を養う。		
到達目標	演奏家として舞台上で演奏するのに必要な高度な演奏技能の向上をめざし、作品を深く考察し解釈すること、また表現力の幅を広げていくことを修得する。		
授業計画	1.年間の学習計画と器楽専門実技Ⅰの振り返り 2.リサイタル・プログラム構築の仕方 3.国別の楽曲演奏法の概要と討論 4.ドイツ音楽の研究・演奏(1) 5.ドイツ音楽の研究・演奏(2) 6.ドイツ音楽の研究・演奏(3) 7.フランス音楽の研究・演奏(1) 8.フランス音楽の研究・演奏(2) 9.フランス音楽の研究・演奏(3) 10.イタリア音楽の研究・演奏(1) 11.イタリア音楽の研究・演奏(2) 12.イタリア音楽の研究・演奏(3) 13.ロシア音楽の研究・演奏(1) 14.ロシア音楽の研究・演奏(2) 15.ロシア音楽の研究・演奏(3) 16.北欧音楽の研究・演奏(1) 17.北欧音楽の研究・演奏(2) 18.北欧音楽の研究・演奏(3) 19.東欧音楽の研究・演奏(1) 20.東欧音楽の研究・演奏(2) 21.東欧音楽の研究・演奏(3) 22.邦人作品の研究・演奏(1) 23.邦人作品の研究・演奏(2) 24.リサイタル・プログラムノート作成 25.リサイタル・プログラムノート発表 26.指導法研究(1) 27.指導法研究(2) 28.トークつきコンサートの進め方 29.ステージマナー等、演奏の現場での全体の所作 30.発表演奏		
評価方法 (合計100%)	実技試験80%、レッスンに向けた積極性20%		
失格条件	なし		
予習・復讐の準備 学習などのアドバイス	なし		
課題へのフィード バック	なし		
教科書	授業内で指示する。		
著者名			
出版社			
参考書			
その他	「器楽専門実技Ⅰ」(弦楽器)の単位を修得した者に限る。		
備考			
科目生への開講	なし		

ナンバリング		期間	通年
授業科目名	器楽専門実技Ⅱ(打楽器)		
英訳科目名	Applied music (Orchestral Instruments) Ⅱ		
担当教員名	管弦打部門		
ディプロマ・ポリシー1		ディプロマ・ポリシー2	
ディプロマ・ポリシー3		ディプロマ・ポリシー4	
ディプロマ・ポリシー5		ディプロマ・ポリシー6	
授業概要・ポイント	器楽専門実技Ⅰで習得したものを基に、さらに次元の高いものに展開させるべく研鑽を積んでいく。音楽の古典から現代に至る様式の変遷を鑑みること、また諸国のさまざまな地域の楽族群に接し、その諸相についてそれぞれの特色を自己の演奏に反映させる。さらに個人および団体(オーケストラ)の演奏における対応力、指導法研究、ステージでの所作や演奏会を企画および進行させる取り組み等々、さまざまな社会的要請に対応しうる能力を養う。		
到達目標	演奏家として舞台上で演奏するのに必要な高度な演奏技能の向上をめざし、作品を深く考察し、いかしくすること、また表現力の幅を広げていくことを修得する。		
授業計画	<ol style="list-style-type: none"> 1.年間の学習計画(オリエンテーション) 2.リサイタルプログラムの構築 3.現代楽曲5と6の実技演習: 楽曲分析 4.現代楽曲5と6の実技演習: 作曲家と作品の背景研究 5.現代楽曲5と6の実技演習: 解釈と演奏法の研究(1) 6.現代楽曲5と6の実技演習: 解釈と演奏法の研究(2) 7.現代楽曲5と6の実技演習: 解釈と演奏法の研究(3) 8.現代楽曲5と6の実技演習: 解釈と演奏法の研究(4) 9.現代楽曲5と6の実技演習: まとめ 10.オーケストラ・スタディの演習: 小太鼓・鍵盤楽器(1) 11.オーケストラ・スタディの演習: 小太鼓・鍵盤楽器(2) 12.オーケストラ・スタディの演習: ティンパニ・打楽器(1) 13.オーケストラ・スタディの演習: ティンパニ・打楽器(2) 14.オーケストラ特別研究・実習: プロオーケストラでの実習(1) 15.オーケストラ特別研究・実習: プロオーケストラでの実習(2) 16.現代作品7と8(協奏曲を含む)の実技演習: 楽曲分析 17.現代楽曲7と8の実技演習: 作曲家と作品の背景研究 18.現代楽曲7と8の実技演習: 解釈と演奏法の研究(1) 19.現代楽曲7と8の実技演習: 解釈と演奏法の研究(2) 20.現代楽曲7と8の実技演習: 解釈と演奏法の研究(3) 21.現代楽曲7と8の実技演習: 解釈と演奏法の研究(4) 22.現代楽曲7と8の実技演習: まとめ 23.オーケストラ特別研究・実習: プロオーケストラでの実習(3) 24.オーケストラ特別研究・実習: プロオーケストラでの実習(4) 25.リサイタルプログラムノート作成 26.リサイタルプログラムノート発表 27.指導法の研究 28.トーク付きコンサートの進め方 29.ステージマナー等、演奏現場での全体の所作 30.発表演奏 		
評価方法 (合計100%)	実技試験50%、研究レポート30%、レッスンに向けた積極性20%		
失格条件	なし		
予習・復讐の準備 学習などのアドバイス	なし		
課題へのフィード バック	なし		
教科書	授業内で指示する。		
著者名			
出版社			
参考書			
その他	「器楽専門実技Ⅰ」(打楽器)の単位を修得した者に限る。		
備考			
科目生への開講	なし		

ナンバリング		期間	通年
授業科目名	作曲専門実技 I		
英訳科目名	Seminar in Musicological Research I		
担当教員名	作曲部門		
ディプロマ・ポリシー1		ディプロマ・ポリシー2	
ディプロマ・ポリシー3		ディプロマ・ポリシー4	
ディプロマ・ポリシー5		ディプロマ・ポリシー6	
授業概要・ポイント	作曲を領域とする者に作曲実技の指導を行う。21世紀の現在、創作活動はテクノロジーとの共存が不可欠である。従って「プログラミングによる作曲」「ソフトウェアを援用した作曲」を作曲技術の一つとして習得しながら、作曲の原点であるイメージやアイデアをより大切に温め、音楽におけるアイデンティティの確立を目指す。		
到達目標	1.研究計画で予定している作品を作曲することを通じて、作曲という創作行為の理解を深め、履修者自身の作品がより豊穡なることを目標とする。 2.作曲とテクノロジーの関係を理解して、必要に応じてソフトウェアなどを自由に利用できる技能を獲得することを目標とする。		
授業計画	1.研究計画に従い、年間計画の決定（オリエンテーション） 2.研究課題の添削（1） 3.研究課題の添削（2） 4.研究課題の添削（3） 5.研究課題の添削（4） 6.研究課題の添削（5） 7.MAXによるプログラミング（1）／研究課題の添削（6） 8.MAXによるプログラミング（2）／研究課題の添削（7） 9.MAXによるプログラミング（3）／研究課題の添削（8） 10.MAXによるプログラミング（4）／研究課題の添削（9） 11.MAXによるプログラミング（5）／研究課題の添削（10） 12.研究課題の添削（11）／MAXによる作品添削（1） 13.研究課題の添削（12）／MAXによる作品添削（2） 14.研究課題の添削（13）／MAXによる作品添削（3） 15.研究課題の添削（14）／MAXによる作品添削（4） 16.研究課題の添削（15）／MAXまとめ 17.スペクトル技法（1）／研究課題の添削（16） 18.スペクトル技法（2）／研究課題の添削（17） 19.スペクトル技法（3）／研究課題の添削（18） 20.スペクトル技法（4）／研究課題の添削（19） 21.スペクトル技法（5）／研究課題の添削（20） 22.Audio Sculptによる倍音解析（1）／研究課題の添削（21） 23.Audio Sculptによる倍音解析（2）／研究課題の添削（22） 24.Audio Sculptによる倍音解析（3）／研究課題の添削（23） 25.研究課題の添削（24）／倍音由来の微分音による作品添削（1） 26.研究課題の添削（25）／倍音由来の微分音による作品添削（2） 27.研究課題の添削（26）／倍音由来の微分音による作品添削（3） 28.研究課題の添削（27）／倍音由来の微分音による作品添削（4） 29.研究課題の添削（28）／倍音由来の微分音による作品添削（5） 30.研究の進捗状況の確認		
評価方法 (合計100%)	研究課題の進捗状況 50% プログラミングの理解度、ソフトウェアの理解度 50%		
失格条件	なし		
予習・復讐の準備 学習などのアドバイス	なし		
課題へのフィード バック	なし		
教科書	研究課題により、適宜指示する。		
著者名			
出版社			
参考書			
その他			
備考			
科目生への開講	なし		

ナンバリング	期間	通年
授業科目名	作曲専門実技Ⅱ	
英訳科目名	Applied Music(Composition)Ⅱ	
担当教員名	作曲部門	
ディプロマ・ポリシー1	ディプロマ・ポリシー2	
ディプロマ・ポリシー3	ディプロマ・ポリシー4	
ディプロマ・ポリシー5	ディプロマ・ポリシー6	
授業概要・ポイント	「作曲専門実技Ⅱ」で習得した作曲技術、思考を基に自由な編成（独奏曲から大規模な管弦楽曲）による修了作品の指導を行う。修了作品が研究の集大成であり、職業的作曲家としての第一歩になるように、また「作曲とは何か」という根源を見つめ直すことにより、作曲における大きな指針である「未聴感（これまで聴いたことのない感觸の音楽）」を意識した創作を探求する。	
到達目標	1.研究計画で予定している修了作品の作曲を通じて、作曲という創作行為の理解をさらに深め、履修者自身の作品がさらに豊穡になることを目標とする。 2.「未聴感」という究極目標を追い求める創作姿勢を身に付けることを目標とする。	
授業計画	1.研究計画を再確認、年間計画の決定（オリエンテーション） 2.Orchids（1）／研究課題の添削（1） 3.Orchids（2）／研究課題の添削（2） 4.研究課題の添削（3）／Orchidsによるオーケストレーション 5.研究課題の添削（4）／Orchidsまとめ 6.Open Musicによるプログラミング（1）／研究課題の添削（5） 7.Open Musicによるプログラミング（1）／研究課題の添削（6） 8.Open Musicによるプログラミング（2）／研究課題の添削（7） 9.Open Musicによるプログラミング（3）／研究課題の添削（8） 10.Open Musicによるプログラミング（4）／研究課題の添削（9） 11.Open Musicによるプログラミング（5）／研究課題の添削（10） 12.研究課題の添削（11）／Open Musicを援用した作品添削（1） 13.研究課題の添削（12）／Open Musicを援用した作品添削（2） 14.研究課題の添削（13）／Open Musicを援用した作品添削（3） 15.研究課題の添削（14）／Open Musicまとめ 16.研究課題（修了作品）の添削（1） 17.研究課題（修了作品）の添削（2） 18.研究課題（修了作品）の添削（3） 19.研究課題（修了作品）の添削（4） 20.研究課題（修了作品）の添削（5） 21.研究課題（修了作品）の添削（6） 22.研究課題（修了作品）の添削（7） 23.研究課題（修了作品）の添削（8） 24.研究課題（修了作品）の添削（9） 25.研究課題（修了作品）の添削（10） 26.研究課題（修了作品）の総括（1） 27.研究課題（修了作品）の総括（2） 28.研究課題（修了作品）の総括（3） 29.研究課題（修了作品）の総括（4） 30.作曲とは、という問いについて（まとめ）	
評価方法 (合計100%)	研究課題の進捗状況 50% プログラミングの理解度、ソフトウェアの理解度 50%	
失格条件	なし	
予習・復讐の準備 学習などのアドバイス	なし	
課題へのフィード バック	なし	
教科書	研究課題により、適宜指示する。	
著者名		
出版社		
参考書		
その他	「作曲専門実技Ⅱ」の単位を修得した者に限る。	
備考		
科目生への開講	なし	

ナンバリング	期間	通年
授業科目名	音楽学研究演習 I	
英訳科目名	Seminar in Musicological Research I	
担当教員名	黒坂 俊昭、大谷 紀美子	
ディプロマ・ポリシー1	ディプロマ・ポリシー2	
ディプロマ・ポリシー3	ディプロマ・ポリシー4	
ディプロマ・ポリシー5	ディプロマ・ポリシー6	
授業概要・ポイント	音楽学研究は音楽作品の構造分析や音楽史の様式分析に留まらず、周辺との学際研究にまで範囲を広げているが、本演習では西洋音楽史に関しての研究に限ることとする。中世・ルネサンス期・バロック期・古典派期・ロマン派期・20世紀と時代様式を変遷していく西洋芸術音楽の歴史の諸相について、様式史の推移は言うまでもなく、西欧・中欧・東欧といった民族意識の相違や、政治史・社会史などの視点からの考察も可能とする。	
到達目標	研究課題を正しく選択し、先行研究を綿密に調査できるようになる。	
授業計画	<ol style="list-style-type: none"> 1.本演習の研究に係る年間計画 2.研究課題の設定① 3.研究課題の設定② 4.研究課題の設定③ 5.研究に必要な事項の検討① 6.研究に必要な事項の検討② 7.先行研究の調査と収集① 8.先行研究の調査と収集② 9.先行研究の調査と収集③ 10.先行研究に関する論文等の精読① 11.先行研究に関する論文等の精読② 12.先行研究に関する論文等の精読③ 13.先行研究に関する論文等の精読④ 14.関連の深い先行研究の紹介① 15.関連の深い先行研究の紹介② 16.主要先行研究の整理① 17.主要先行研究の整理② 18.主要先行研究の整理③ 19.オリジナル研究の開始及び展開① 20.オリジナル研究の開始及び展開② 21.オリジナル研究の開始及び展開③ 22.研究課題に係る話題に関する見解のまとめ① 23.研究課題に係る話題に関する見解のまとめ② 24.研究課題に係る話題に関する見解のまとめ③ 25.研究課題に係る話題に関する見解のまとめ④ 26.小論文の制作① 27.小論文の制作② 28.小論文の制作③ 29.小論文の制作④ 30.小論文の発表 	
評価方法 (合計100%)	平常所見20% 前期末提出レポートの内容30% 最終提出レポートの内容50%	
失格条件	なし	
予習・復讐の準備 学習などのアドバイス	なし	
課題へのフィード バック	なし	
教科書	なし	
著者名		
出版社		
参考書		
その他		
備考		
科目生への開講	なし	

ナンバリング		期間	通年
授業科目名	音楽学研究演習Ⅱ		
英訳科目名	Seminar in Musicological Research Ⅱ		
担当教員名	黒坂 俊昭、大谷 紀美子		
ディプロマ・ポリシー1		ディプロマ・ポリシー2	
ディプロマ・ポリシー3		ディプロマ・ポリシー4	
ディプロマ・ポリシー5		ディプロマ・ポリシー6	
授業概要・ポイント	「音楽学研究演習Ⅰ」の授業で修得した西洋音楽史の知見を基に学生自らが設定した研究課題に対し、その研究方法や方向性について助言を行い、修士論文の完成に到らしめる。それにあたって研究計画の段階から受講生と意見を交わし、文献や資料の取り扱い方を指導し、論文構成について綿密な議論を行っていく。また西洋音楽史学の新しい観点や研究をも考慮しながら、音楽学研究に照らして論理性が認められる論文となるように導いていく。		
到達目標	正しい研究方法で論理的な修士論文を完成することができるようになる。		
授業計画	<ol style="list-style-type: none"> 1.修士論文に向けての年間計画 2.前年度の研究成果の総括① 3.前年度の研究成果の総括② 4.修士論文の構成の検討① 5.修士論文の構成の検討② 6.修士論文における一つの章の書き下ろし① 7.修士論文における一つの章の書き下ろし② 8.修士論文における一つの章の書き下ろし③ 9.記述した章の検討① 10.記述した章の検討② 11.他の一章の書き下ろし① 12.他の一章の書き下ろし② 13.他の一章の書き下ろし③ 14.新たに記述した章の検討① 15.新たに記述した章の検討② 16.修士論文の作成① 17.修士論文の作成② 18.修士論文の作成③ 19.修士論文の作成④ 20.修士論文の全体的検討① 21.修士論文の全体的検討② 22.修士論文の全体的検討③ 23.修士論文の全体的検討④ 24.付属資料及び文献表の作成① 25.付属資料及び文献表の作成② 26.序言と結語の作成① 27.序言と結語の作成② 28.プレゼンテーションの準備と発表① 29.プレゼンテーションの準備と発表② 30.最終検討 		
評価方法 (合計100%)	平常所見20% 前期末提出レポートの内容30% 最終提出レポートの内容50%		
失格条件	なし		
予習・復讐の準備 学習などのアドバイス	なし		
課題へのフィード バック	なし		
教科書	なし		
著者名			
出版社			
参考書			
その他	「音楽学研究演習Ⅰ」の単位を修得した者に限る。		
備考			
科目生への開講	なし		

ナンバリング		期間	通年
授業科目名	作品研究報告書制作		
英訳科目名	Report on Musical Works of Master's Performance		
担当教員名	泉 貴子、黒坂 俊昭		
ディプロマ・ポリシー1		ディプロマ・ポリシー2	
ディプロマ・ポリシー3		ディプロマ・ポリシー4	
ディプロマ・ポリシー5		ディプロマ・ポリシー6	
授業概要・ポイント	<p>声楽、鍵盤、器楽、作曲の領域を履修する者は、修士演奏審査又は修士作品発表審査とともに、演奏曲又は発表曲についての口述による試験に合格することが求められる。この試験に際しては、事前に「作品研究報告書」を提出しなければならない。報告書は、該当する作品の成立や作曲者の作曲意図や構想などを中心に、論理的な展開が求められる。その内容は各々の修士演奏や修士作品と深く係るものであり、執筆者の独自の視点からの文章構成が不可欠である。報告者執筆に関するさまざまな技術や独自性の表現方法、さらには演奏等と関係づける思考などについて、受講生個々人の場合に応じて指導する。</p>		
到達目標	独創的な作品研究報告書を完成することができるようになる。		
授業計画	<ol style="list-style-type: none"> 1.作品研究報告書制作に向けての年次計画 2.入学願書出願時に提出する研究テーマ及び研究計画との比較検討 3.入学直後に研究指導担当教員と作成した研究計画との整合 4.研究計画に記載された楽曲およびその周辺の音楽の様式史的考察① 5.研究計画に記載された楽曲およびその周辺の音楽の様式史的考察② 6.研究計画に記載された楽曲およびその周辺の音楽の様式史的考察の文章化 7.研究計画に記載された楽曲およびその周辺の音楽の精神史的考察① 8.研究計画に記載された楽曲およびその周辺の音楽の精神史的考察② 9.研究計画に記載された楽曲およびその周辺の音楽の精神史的考察の文章化 10.研究計画に記載された楽曲およびその周辺の音楽の演奏論的考察① 11.研究計画に記載された楽曲およびその周辺の音楽の演奏論的考察② 12.研究計画に記載された楽曲およびその周辺の音楽の演奏論的考察の文章化 13.研究計画に記載された楽曲等の作曲家に関する伝記的考察① 14.研究計画に記載された楽曲等の作曲家に関する伝記的考察② 15.研究計画に記載された楽曲等の作曲家に関する伝記的考察の文章化 16.作品研究報告書の中心となる楽曲の確認 17.作品研究報告書を作成する基礎となる分析方法の検討 18.作品研究報告書における複数の分析方法による複合的研究の模索 19.作品研究報告書作成にあたって主となる分析方法の検討と決定 20.作品研究報告書作成にあたって決定した分析方法による先行研究の研究① 21.作品研究報告書作成にあたって決定した分析方法による先行研究の研究② 22.作品研究報告書作成にあたって決定した分析方法による楽曲の分析① 23.作品研究報告書作成にあたって決定した分析方法による楽曲の分析② 24.作品研究報告書の展開と構成 25.研究計画に記載された楽曲等の考察および先行研究を踏まえた楽曲分析の文章化① 26.研究計画に記載された楽曲等の考察および先行研究を踏まえた楽曲分析の文章化② 27.作品研究報告書の本論の完成 28.作品研究報告書の注釈や参考資料（文献表等）の添付 29.作品研究報告書全編の確認 30.プレゼンテーションの準備と発表 		
評価方法 (合計100%)	平常所見20% 前期末提出の研究報告書30% 最終提出の研究報告書50%		
失格条件	なし		
予習・復讐の準備 学習などのアドバイス	なし		
課題へのフィード バック	なし		
教科書	なし		
著者名			
出版社			
参考書			
その他	声楽、鍵盤、器楽、作曲の領域を履修する者は必ず履修しなければならない。		
備考			
科目生への開講	なし		

